

鍊金術者のユートピア

偽葛洪の夢と幻想の地理的世界像

山田慶兒

1 鍊金術書のなかの外国志

道教研究によって知られるフランスの歴史家アンリ・マスペロに、「ローマ・オリエントにかんするある道教文献」と題する論文がある⁽¹⁾。ある道教文献とは、『道蔵』洞神部・衆術類に収める、『太清金液神丹経』巻下を指す。マスペロはそこにみえる大秦国、すなわちローマ・オリエントの記述に注目し、その検討と翻訳を試みたのである。漢代以来、「中国人の架空地理⁽²⁾」のなかで、事実と作り話をないまぜて描かれてきた地中海諸国は、まだ注目されたことのないこの道教文献のなかに、どのように表現されているだろうか。マスペロの関心は、もっぱらそこに向けられていた。その後、饒宗頤は『太清金液神丹経』巻下とほかの文献との詳細な比較を試みた⁽³⁾、それはこの書に南方と西域の諸国の位置やそこにいたる里程、

制度や風俗や産物などが記載されており、古地理研究に貴重な資料を提供しているとみなしたからであった。この書の里程の記載を『魏志』倭人伝の研究に、比較の材料として用いようとする試みもあらわれている⁽⁴⁾。

歴史家たちがこの書に着目するのは、史料的价值のゆえである。そこにはなんらかのかたちで事実が書かれており、厳密な史料批判をおこなえば、その事実をとりだすことができる、と考えるからである。マスペロは作り話にもおなじように興味をよせたが、それも事実とないまぜになって古代中国人の西洋観をしめすかぎりにおいてであった。

だがそれにしても、中国の正史でいえば南蛮伝と西域伝にあたる外国志が、選りに選って、題名からもちに鍊金術書とわかる『太清金液神丹経』三巻のなかに、その一卷としてふくまれている

のは、なぜだろうか。上・中巻とはなんの内容的な繋がりもなしに、なんらかの理由によって、たまたまその下巻に組みこまれたのであろうか。それとも、この書の著者がある明確な意図をもって、それを『太清金液神丹経』の下巻に配置し、全巻の締めくくりにしようとしたのであろうか。もし前者であれば、この書は正史の外国伝やその他の外国志とおなじ史料の価値をもつ、と一応みなしいだろう。しかし後者であれば、著者の意図が諸国の記述にある方向づけをあたえているだろうし、そこに独自の彩りをそえているだろう。そしてその分だけ、史料の価値は減少しているだろう。この書の記述にマスペロが失望せざるをえなかったのは、わたしの考えでは、まさにその点にかかわっている。

この文章の意図は、『太清金液神丹経』巻下から事実を抽出してくることにはない。この書にそがれた歴史家たちの眼とは逆に、わたしの関心は作り話にある。わたしはこの書の虚構性を明らかにすることによって、ひとりの錬金術者が遥かな西方の国々に託したユートピア、夢と幻想の地理的世界像を描き出したいと思う。

2 偽葛洪の航海と伝聞

『太清金液神丹経』三巻は、巻ごとに撰者ないし序文の作者を異にする。

巻上 正一天師張道陵序

巻中 長生陰真人撰

巻下 抱朴子序述

巻上・中は純然たる錬金術書であり、マスペロは五世紀前半の成書とみる。張道陵と長生陰真人は仮託である。むしろそのことは、巻上に挿入されている、「此れ太清金液神丹経文なり。本と上古の書にして解す可からず。陰君漢字と作して之を顯出せり。合せて五百四字有り」と注記された、

金液丹華は是れ天経

泰清の神仙諒ること分明なり

にはじまる七言の韻文、おなじく「古の書は難し。陰君之を顯す」とされ、巻中の冒頭に置かれた、

金液還丹仙華を流し

高飛翺翔して天丘に登る

にはじまる七言の韻文などの「句凡そ七字、金液凡そ五百四字、還丹凡そ六十三字」、合わせて「太清金液神丹凡そ五百七十六字」の出現が、おそらくは漢代に遡ることを否定するものではない。陳国符によれば、「太清金液神丹」の押韻は、その成立が前漢末か後漢初であることを示している。⁽⁶⁾ 現存する『太清金液神丹経』巻上・中は「太清金液神丹」を核にして、その解説書として書かれた、著作年代にはかなり幅のある数篇の文章を集めたもの、とみなすことができよう。道教文献がこうした複雑な構成をとるのは、ごく普通の

ことである。なお、ここに『太清金液神丹經』三巻の成書年代というときは、それぞれの書が現存するかたちをととのえた時期を指す。

ちなみに、葛洪撰とされる『神仙伝』によれば、陰長生は後漢、新野（河南省）の人。和帝の永元八年（九六）に皇后となった陰氏は、長生の曾孫であった。新野にほど近い南陽の馬明生について道術を学ぶこと二十年、『太清金液神丹』を授けられたという。『太清金液神丹經』の注記は陰真君伝の記述とよく合う。もっともこれは、『太清金液神丹經』のほうが『神仙伝』にもとづいて陰長生に仮託したのかも知れぬ。⁽⁷⁾ かりにそうだとすると、『太清金液神丹』の成立の古さはそれとは別の問題である。なお張道陵は後漢、沛郡豊（江蘇省）の人。蜀（四川省）の鶴鳴山で道術を修め、漢安元年（一四二）に古道教の五斗米道を開いた張陵そのひとである。

鍊金術書の巻上・中にたいして、巻下は、日南（ヴェトナム）から扶南（カンボジャ）への旅行記とそこで伝聞した西方諸国の話の記録、という形式をとる。作者とされる、東晋の道教思想家・鍊金術者であり、『抱朴子』を著した葛洪（二八三—三六四）は、『抱朴子』外篇・自叙や『晋書』巻七二・葛洪伝によれば、光熙元年（三〇六）ごろ広州に赴き、かなり長期にわたってその地にとどまり、咸和六年（三三一）ごろふたたび広州に赴き、晩年を羅浮山に送った。扶南に行った記録はなく、仮託にちがいない。ところが陳国符⁽⁸⁾は、巻下はおそくとも梁代には世にあらわれたが、葛洪在世時にあ

ったかどうかは疑わしいとするいっぽうで、葛洪は最初の広州滞在中、扶南に行き、その聞見を『太清金液神丹經』の後に付したともいう。それにたいして饒宗頤⁽⁹⁾は、もし葛洪の手に成るとすれば咸和六年以後のことだと主張し、晋人によって抱朴子に仮託された部分があることを認める。また実際に葛洪の著作とみなすひともあり、最近出版された『道藏提要』はその立場をとる。⁽¹⁰⁾ しかし、この書の全体がマスペロのいう偽葛洪 *le pseudo-Ko Hong*⁽¹¹⁾ の作品であることを物語っている、とわたしは考える。

マスペロは、この書の偽葛洪序に「大奈・拂林」とみえる拂林が中国にはじめて知られたのは七世紀初めであること、実在しない大奈がもし大食（アラビア）を誤ったものとすれば、大食が中国に知られたのも七世紀前半であること、旅行記のなかで重要な位置を占める扶南が真臘（カンボジャ）に亡ぼされたのも同じ頃であることから、七世紀中葉か後半の著作と推定した。⁽¹²⁾ その後、R・A・スタンは、マスペロの指摘したのよりもっと早い時期に拂林に言及した文献があり、著作年代を六世紀半ばか初めにまで引き上げるべきだ、と主張した。⁽¹³⁾ ここではとりあえずスタンの説に従っておこう。

それでは、『太清金液神丹經』巻下（以下、『神丹經』下と記す）の著者、偽葛洪とはなにものか、むろん不明だが、なんの手掛りもないわけではない。『神丹經』下には、

葛洪曰く、洪曾て人の南方の異同を撰し、外域の奇生を記すを

見るに、粗^ほ該^{がい}実^じに近しと雖も、而も履む所蓋し浅く、甚だ四遐の妖を甄^{あき}かにするに足らず、逸銘^{いせき}の殊方^くを目に内^いるるに於いておや。

という文章にはじまる、長い序がついている。わたしが注目するのは、その一節のつぎの表現である。

丹砂と称するは東瀛^{とうよう}の瓦石の如く、
流丹を履むは甄陶^{けんとう}の灰壤の如し。

東瀛は東甌^{とうおう}の誤り。福建省建甌県。陶器の名産地であり、いわゆる建窯の所在として知られる。甄陶は轆轤で陶器をつくること、灰壤は灰色の陶土を指す。物の多さの譬えとして建甌という窯業地の陶器の破片や陶土が脳裏に浮かぶというのは、偽葛洪がその地方の出身であるか、あるいはそのあたりに長く住んでいたか、いずれにしても建甌と深いかわりをもつ人物であったことを示唆する。偽葛洪が錬金術、すなわち陶器の壺に調合した石薬を入れ、爐で熱して靈薬の金液・還丹をつくる技術に入っていたのは、あるいはなじんでいた製陶技術と無関係ではないのかも知れない。「揚州に家す」とあるのは、葛洪とみせかけるための細工であろう。

出身地はともかく、序によれば、偽葛洪は若いころから宗教的世界に惹かれていた。「余は少くして道を学ばんと欲し、志を遐外に遊ばす」。遐外とは、地理的に遠く離れた土地であるとともに、世俗を超えた聖なる世界でもある。遐外への脱出願望のなかに、わた

したちは容易に、偽葛洪を南方への航海に駆り立てた、深い心理的動因を読みとることができる。

偽葛洪は、扶南に赴き、そこでさらに遠い西方諸国のことを伝聞するにいたった経緯を、序論においてこう語っている。

むかし、若き日の偽葛洪は暇にまかせて、南へ旅立った。はじめは交州・嶺南（広東・広西・北ヴェトナム）のあたりを觀るつもりにすぎなかったのが、たまたま便があり、とうとう扶南（カンボジア）まで来てしまう。扶南は土地が方千里あまり、人口は億を計え、山に囲まれ海に面し、その境界は遙かかなたにある。ここらあたりが南の際果ての国か、と偽葛洪は思ったほどだ。ところが陰曆五月になり、南風が吹きはじめると、まるで川の流れにでも乗ったように、南からやってきた者がいる。南方の土地や国俗について尋ねると、「天竺（インド）・月支（アフガン）からこちらに、扶南のような、名を知られた国や大きな国が十幾つあります。しかも大奈や拂林は土地がそれぞれ三万里四方、その間に散在する小国ときたら、数えあげることができません」という。

実際に見聞した扶南とその四隣の国は、後年の偽葛洪の眼にはこう映じた。

どうしたことか（奚？）扶南・頓（典）遜より林邑・杜薄・無倫にいたる五国の中は、朱砂・琉黄・曾石・石精の産地であり、これら神仙に導く服食の薬、長生を保たせる石は、じっさいに

求めればかならず手に入り、もはやその別名をいちいち述べることはできない。丹砂と称するものは東瀛（甌）の瓦石のようにおびただしく、流丹を踏むのは轆轤にかける灰色の陶土を踏むようなもの、じかに触れたり見比べたりしたところで量れるものではない。ところが、この五国には服用の技術は存在せず、長生延命の道は知られていない。貴重な物は使われないままに天下にあふれ、靈石を打ち棄てて一顧だにせず、飾りたてた愛玩用の商品を追い求めて、流丹の薬は蔑み、鍊成した薬は用いず、真の本質は長に隠れたままである。

偽葛洪によれば、「道を学び生に志すは、類に貧士多」く、長生の靈薬の丹をつくるのに必要な鉈石を入手する術がない。また戦乱に追われ、「薬を求めて以って性命を養う」ゆとりもない。

夫れ人は大いに渴すれば長く長河に臨まんと願い、大いに飢えれば思いを農圃に託す。道を学ばんと欲する者は、何ぞ靈方を抱かざる。其の地に遊ばば、則ち何ぞ丹石の匱乏を憂えんや。丹石の豊富さにおいてかの五国は、鍊金術の実践に必要な条件を満たしている。だが、それだけでは十分でない。

彼用丹の術を貴ばざれば、則ち我が為す所の事を貴ばず。

このような土地では、経済的には安んじて鍊金術に従事できよう。しかし、深奥なる道理をそこに求めることはできない。

だが、若き日に伝聞した話によれば、遐か南の大いなる境域には、

名山が連なり、神仙の住む王国、洞天福地が開けているという。遐外に遊ぼうとする志は年とともに強まり、偽葛洪は新たな旅立ちを決意する。

但だ此の五国は皆な人跡の逮る所なり、奚ぞ渺渺たりと為すに足らんや。是を以て其の遐かなるを嫌わずして、其の国に之かんと欲す。其の遠かなるを辞せざれば、必ず其の郷に到らん。

これはついに「狂人の志」であろうか。

人が狂とみなすであろう旅立ちにあたつて、偽葛洪は弟子たちが「以て視聴を廣む可き」一書を、後世に遺そうとする。

今生丹の国を撰し、外邦を紀識し、并せて愚心を申べて、金液の後に付す。

すなわち、『神丹經』下の序のあとに収める諸国志である。ここにいう「金液」は、『太清金液神丹經』巻上・中を指すにちがひなく、この一節は、『太清金液神丹經』三巻の最後の編者がおそらくは偽葛洪であり、下巻は上・中巻の後に置くことを前提して書かれたものであるのを、間接に物語っている。

3 剽窃『南州異物志』

偽葛洪の諸国志は、散文で書かれた本論を、四言の韻文の序章と終章がはさむ構成をとる。序章はつぎのようにはじまる。

行邁ちこと靡ちたり、舟を洪川うかに汎ふぶ。

象林よ自り発はち、箕いに迎むかい、辰ほつきを背せにし、

風に乗り流れに因より、電いなづま邁まき星奔せいり、

宵よひのみち明あき停とまること莫なく、日を積ためること旬に倍ふし、

乃すなはち扶南いに及いたれば、王有わうり君有きんり、

厥そのの国は悠悠ゆうゆうとして、萬里かりを垠ぎんと為なす。

「行邁靡靡」は『詩經』王風・黍離の句、靡靡は遲遲。象林はヴェトナム中部、漢代の日南郡象林県。南は林邑に接し、南下する中国勢力と北上するヴェトナム在地勢力とのせめぎあいの場所となった地方である。このあたりの地理については、北魏の酈道元れいどうげん（?—五二七）の『水経注』温水条に詳しく、『梁書』諸夷伝などにももちろん記載がある。ここが偽葛洪の航海の出発点であった。

序論はつづける。扶南は、国は広く、北は林邑に到り、南は典遜に抱かれ、左は杜薄に連なり、右は無倫に接し、雲集する人と物にあふれている。前に境を界かぎるものとてなく、ここは天地の果てかと思ったが、そうではない。南から来た旅人の話では、さらに句稚・歌宮・林楊・加陳・師漢・扈利・斯調・大秦・古奴・察牢・葉波・鬬賓けいひん・天竺・月支・安息・優銭といった数多くの国があり、大きいものは数万里四方、小さいものでも数千里四方におよぶ。それより以遠の地はどこまで続くのか、その旅人も知らない、と。

この序章は、本論にたいする目次の役割も果たしている。序章に

その名はみえないのに本論に記載されている国に、象林国に付記された西図は別として、隱章がある。蒲羅中は、『太平御覽』卷七八七に引く呉の康泰の『扶南土俗伝』では一国としてとりあげられているが、ここでは歌宮国の一地方である。また、たんに国名に言及するものに都昆と比嵩があり、古奴は本論中には古奴斯調として出てくる。逆に、序章に国名があつて本論に記載が漏れているのは、天竺である。これはおそらく現存するテキストの欠落であろう。要するに、目次になくて本論にあるのが隱章、目次にあつて本論にないのが天竺ということになる。

偽葛洪の諸国志の本論、すくなくともその骨格を成す部分が、じつは『隋書』經籍志に著録されている、

南州異物志一卷 吳丹陽太守万震撰

の抄録にはかならないことは、マスペロのつとに指摘したところであつた。⁽¹⁴⁾序章の目次は、『南州異物志』の林邑以遠の目次でもあるにちがいない。

『南州異物志』は佚書である。『三国志』には呉（二二—二八〇）の丹陽（江蘇省江寧県）の太守であつたという万震の名はない。さしいわい佚文は、『太平御覽』その他の類書、『史記』大宛伝・正義その他の史書、『齊民要術』その他の技術書など、多くの書に散見する。清末の陳運溶はその輯本をつくつて古海国遺書鈔に収め、麓山精舍叢書の一冊として刊行した。近年、小川博と内田吟風は佚文を

さらに広汎に収集し、それぞれ発表している。⁽¹⁵⁾これらの輯本には『神丹経』下の文は収められていない。他書にみえる佚文と偽葛洪の書の文とのあいだには多くの異同があり、『南州異物志』のいっそう完全な輯本をつくる作業は今後に残された課題であろうが、あとで述べる理由によって、それには著しい困難がつきまとうだろう。『南州異物志』はいわば諸国志と物産志の二つの要素から成り立っている。三つの輯本がいずれも諸国の記述を前に、物産の記述を後に配しているのはおそらく妥当であり、原書の構成もその通りであったろう。それを有力に傍証するのが、偽葛洪の書の本論の後に置かれた終章である。

衆香、雜類は、各自原有あり。尤の沈浮するは、日南に出で、都梁の青霊なるは、典遜に出で、雞舌の芬羅たるは、杜薄に生じ、幽簡なる茹来は、無倫に出で、青木は天竺、鬱金は罽賓、蘇合は安息、薰陸は大秦、威な草木自りし、各自珍ぶ所、或は華或は膠、或は心或は枝なり。唯だ夫の甲香・螺蚌の偏は、歌宮・句稚の淵に生じ、萎蕤は月支、硫黄は都昆、白附は師漢、光鼻は加陳、蘭艾は斯調、幽穆は優錢なるも、余の各それぞれの妙気は、震檀に及ぶこと無し。

本論に先立つ序章が諸国志のいわば目次だとすれば、これは物産志の序章であり目次であろうか、それともはじめから物産志のある種の要約として、したがって本論の後に付す終章として書かれたもの

であろうか。もし前者だとすれば、現存するテキストでは諸国志しがなく、物産志は欠落しているものの、偽葛洪はもととかなり忠実に『南州異物志』の全体を写そうとしていた、と解釈できるだろうし、後者であれば、偽葛洪が著作の意図を実現するためにほんとうに必要としていたのは諸国志の部分だけであった、ということになるだろう。それについてはあとで考えるとして、物産にかんするこの終章の存在は、『南州異物志』が諸国志と物産志から成っていた有力な証しである。

わたしは『神丹経』下の序と諸国志の序章との内容的な近似から、暗黙のうちに序章と終章も偽葛洪の作と想定してきた。しかし、形式からみて、二つの四言の韻文は『南州異物志』のもとの文である可能性も残されている。というのは、『南州異物志』はもとと押韻した四字句の本文と散文の注釈とから成っていたのではないかと推測されるからである。

この問題に最初に鋏を入れたのは、明の楊慎の『丹鉛總録』巻十一・韻語紀異物であった。「余は嘗に晋・宋人の韻語を以て物産を紀すを愛す。郭璞の爾雅贊、山海経贊、王微の藥草贊の如き、皆な質にして工なり。其の原は逸周書・火流布の数語に出ず」として、他書の十二例とともに、「万震南州志」・「万震象贊」・「万震犀贊」各一例、「万震海物異名記」三例、万震の文をあわせて六例を挙げたのである。そのなかには四字句だけでなく、「玉、音は裕。三字

一句、三句一韻、尤も奇なり」と楊慎が評する、「海物異名」の文の「江瑤柱、厥甲美、如瑤玉」などもふくまれている。この「海名異物志」の三例は、他の三例とちがって出典が不明であり、『南州異物志』とはおそらく別の書であろう。

問題を一挙に解決へ近づけたのは、清の侯康の『補三国芸文志』卷三・地志類・万震南州異物志一卷の条であった。侯康は「芸文類聚・御覽は屢しば之を引く。其の中に四字韻語を用いる者有り」として五例を挙げ、つぎのように論じた。

わたしの考えでは、この書の体例は物ごとにそれぞれ一韻語をつくって、別に散文でその形を詳しく説明するのであり、戴凱^{たいがい}之の竹譜の例とおなじである。諸書が散文を引いているばあいには韻が無く、韻語を引いているばあいには韻がある。御覽に引く扶南海隅の一条に小注があるのは、おそらくそのままその散文をとって各韻の下に附注したのであろう。

扶南海隅の一条はすぐあとで引用する。四字韻語と散文の説明とから成るという推論そのものは、おそらく動くまい。しかし、韻文と散文が「竹譜」形式に配置されていたかどうかについては、疑問が残る。劉宋の戴凱之の「竹譜」では、四字韻語と説明の散文とがつぎのように行を改めて交互に配されている。

植類之中、有物曰竹、不剛不柔。非草非木。(植物の中に、物有り竹と曰う。剛ならず柔ならず、草に非ず木に非ず)

山海經・爾雅に……。竹は是れ一族の総名、一形の偏稱なり。植物の中に草・木・竹有るは、猶お動品の中に魚・鳥・獸有るがごとし。……

たしかにこの形式であれば、韻文の佚文と散文のそれとが別べつに残っている、犀や象のようなばあいは容易に説明がつく。だが、あとでしめすように、韻文と散文の組み合わせが残っている二つの例では、散文は割注のかたちで韻文のあいだに挿入されているのである。

それはともかく、『南州異物志』の四字句の文には、韻文としてどんな特徴があるか。まず侯康が集めた『芸文類聚』・『太平御覽』引の佚文によって、その押韻をみておこう。

乃有大貝、奇姿難儔、素質紫飾、文若羅珠、不磨而瑩、采耀光流、思雕莫加、欲琢靡踰、在昔姬伯、用免其拘。(『芸文』卷八)

偶数句の儔 chou・流 liu は尤韻・下平声、珠 zhu・踰 gu・拘 ju は虞韻・上平声である。

獸曰玄犀、處自林麓、食惟棘刺、体兼五肉、或有神異、表靈以角、含精吐烈、望若華燭、置之荒野、禽獸莫觸。(『芸文』卷九)

五) 麓 li・肉 rou・角 jia は屋韻、燭 zhu・觸 chu は沃韻、すべて入声である。

合浦之人、習水善游、俛視增潭、如猿仰株、入如沈黿、出如輕
 鳧、蹲泥剖蚌、潛竊明珠。〔御覽〕卷三九五

游 yu・株 zhu・鳧 fu・珠 zhu すべて虞韻・上平声である。

象之為獸、形体特詭、身倍數牛、目不逾豨、鼻為口役、望遠若
 尾、馴良承教、聽言則跪、素牙玉潔、載籍所美、服重致遠、有
 如邱徒。〔御覽〕卷八九〇

詭 gui・跪 gui・美 mei・徒 xi は紙韻、豨 xi・尾 wei は屋韻、すべ
 て上声である。

侯康のいう扶南海隅一条とは、『御覽』卷七九〇引のつぎの文を
 指す。

南州異物志曰、扶南海隅、有人如獸。此人在扶南之東緣海邊、

若漆、齒白如素。扶南以外民皆漆齒使黑、而此人略如禽獸、人無道理也。身黑

處。此民不知安居、屋宅乃隨寒暑、素逐飲食。冬則登山射麋鹿也。身

寒無衣服、以沙自覆。此人無衣服、若遇過寒涼、輒以沙自覆、惟以出面目耳。

糅。此人或時權有可得停。猶知立一小屋、以自藉家。雖忝人形、無踰六畜。

〔竹譜〕形式の説明文を割注にして四字句の当該箇所の下に挿入し
 たもの、と侯康はみるのである。讀語の偶数句の獸 shou 覆 fu・糅
 rou・畜 xu は有韻、素 su は遇韻、處 chu は御韻、稼 jia は禡韻と
 換韻するが、すべて去声である。この形式の佚文はもうひとつ見つ
 かっている。

南州異物志曰、木有摩廚、生干斯調。摩廚木名也。生於斯調。厥汁肥潤、其

澤如膏、馨香馥郁、可以煎熬。澤如脂膏、可以煎熬食物也。彼州之民、仰為嘉

香。花木志曰、煎熬食物、香美如華夏之人用油。〔御覽〕卷九六〇、〔齊民要術〕卷二〇

調 tiao は蕭韻、膏 gao・熬 ao は豪韻、香 xiang は陽韻、すべて下
 平声である。

『南州異物志』の押韻の特徴は、とくにはじめの四例にみられるよ
 うに、その単純さにある。換韻は少く、合浦之人条のように同じ韻
 で通しているばあいもある。小注をもつあとの二例はやや換韻が多
 いが、それも近い音のあいだで換韻しようとする傾向をしめす。そ
 れはこの作品の著作年代の相対的な古さを物語っている。

それについて『神丹經』下の四字句の押韻はどうか。まず諸国
 志の序章のすでに引用した一節をあげよう。

行邁靡靡、汎舟洪川、発自象林、迎箕背辰、乘風因流、電邁星
 奔、宵明莫停、積日倍旬、乃及扶南、有王有君、厥国悠悠、萬
 里為垠。

川 chuan は先韻・下平声、奔 ben は元韻・上平声、君 jun は文
 韻・上平声、その間に真韻・上平声の辰 zhen、旬 xun、垠 bin が
 入りこむという、かなり複雑なかたちをとる。物産志の序章かそれ
 とも要約か、とさきに書いた終章の文の押韻はどうか。やはり前半
 部分だけをとりだせば、

衆香雜類、各自有原、朮之沈浮、出于日南、都梁青靈、出于典
 遜、雞舌芬蘿、生于杜薄、幽簡如來、出于無倫、青木天竺、鬱

金闕寶……

原 yuan は元韻・上平声、南 nan は覃韻・下平声、遜 xun は願韻・去声、薄 bao は藥韻・入声、倫 lun と賓 bin は真韻・上平声。遜・薄において押韻はくずれている。饒宗頤はなかに方音字があるのではないかと疑い、用韻は何承天（三七〇—四四七）の「上白鳩頌」、謝靈運（三八五—四三三）の「山居賦」、張融（四四四—四九七）の「海賦」、陶弘景（四五二—五三六）の「水仙賦」などに似ているとして、宋（四二〇—四七九）・梁（五〇二—五五七）より以降のものではありえない、と断定する⁽¹⁸⁾。これに従えば、押韻は五世紀前半から六世紀の前半のものと考えていいだろう。いずれにしても押韻の複雑さは、『神丹經』下の四言韻語の作者が万震ではありえず、その著作年代も三世紀の『南州異物志』よりずっと新しいこと、また作者の時代が葛洪の時代よりもすくなくとも一世紀は降ることを、つよく示している。とすれば、偽葛洪の諸国志の序章と終章も、やはり偽葛洪の作品とみるのがもっとも妥当なのである。

序章と終章について、内容的な検討を加えておこう。序章が偽葛洪の作だとすると、「象林自り発し、箕に迎い辰を背にし、……日を積むこと旬に倍し、乃ち扶南に及ぶ」というのは、『神丹經』下の序に、

昔少暇を以って、因りて旅して南行す。初めは交嶺を覩んと謂えるのみ。有緑の便あり、遂に扶南に到る。

という、その扶南行のやや具体的な航程であったことになる。この航程はもういちど本論のなかに、西図国と扶南のあいだに書きこまれるだろう。

日南寿靈浦を出で、海に由りて正南行す、故に辰星を背にして箕星に向うなり。昼夜住まらざること十余日、乃ち扶南に到る。繰り返し書いているところをみれば、よほど強い印象を受けたのであろう。

また、序章に「仲夏に逮り、月紀の賓たる、凱風北に邁み、南旅来臻す」とあるのは、序にいう、

中夏の月に至り、凱風時に動く。又た南自りして来る者有り、至ること川流の若し。

に対応する。偽葛洪が扶南まで行き、南から来た旅人に「名邦大國」(序)の話聞いたというのは、まず事実であったと考えてよい。

終章のほうでまず注意を引くのは、そこにとりあげられている物の片寄りである。長生薬として用いられる朮や萎蕤、丹の原料である硫黄のほかは、鷄舌・青木・鬱金・蘇合・薰陸のような香類、香に雑せて焼く甲香のような貝類、それに都梁・蘭・艾納のような香草類などにかぎられる(如来・白附・光鼻・幽穆の四品目は不詳)。香木・香草類は錬金術者には欠かせない物だった。「太清金液神丹經」巻上によれば、靈薬を調合するときにはまず諸神を祭るが、そ

のときには「香火九鑪を用い」るし、服薬のさいの祭には「座の左右に三鑪の香火を焼き」、「香酒」を供えなければならない。いっぽう、『南州異物志』の物産の記載は多岐にわたっている。たとえば舟や帆、象牙、珊瑚や瑇瑁^{たいま}、椰子や橄欖など、小川博の輯本の分類にしたがえば器用・動物・植物・香の四類にわたっている。偽葛洪はそれを鍊金術者の眼で選択し、不老長生を目指す神仙道教と鍊金術が求めているものにしばってその産地を書き連ね、諸国志をしめくくったのである。それは欠落した物産志の序章兼目次などではなく、はじめから割愛するつもり物産志の鍊金術的な要約であり、諸国志の終章として書かれたのであった。むろんそのことは、この終章が「初期香藥史の重要文獻」¹⁹⁾であることをさまたげるものではない。

諸国志の冒頭と末尾に置かれた四言韻語の文は、もともと本文が四言韻語で書かれていたらしい『南州異物志』の、散文による説明の部分を『太清金液神丹經』にとりこむための、今日ふうにいえばまんまと剽窃するための、苦心の装置であった。その装置のなかで諸国の記述もまた変容せずにはいない。

4 世界の道教化

『南州異物志』の三種類の輯本に収められた佚文を『神丹經』下の文と比較することによって、万震の書とは異なる偽葛洪の諸国志の

特徴をいくつか指摘することができる。

第一に、『神丹經』下では中国領に属する嶺南地方の記述が省かれている。輯本によれば、省かれたのは嶺南に住む俚・烏潯^{うこ}・獠民^{りやうみん}の諸民族志であった。偽葛洪は万震の『南州異物志』からの採録を意図的に外国に限定した。遐外像の構成というねらいは、隣国から遠国へと進められてゆく記述の冒頭において、すでに鮮明であった。第二に、輯本の文より『神丹經』下の文のほうが一般に記述は詳しく、ときとして正確であるようにみえる。たとえば『御覽』七八六の、

南州異物志に曰く、扶南国は林邑の西三千余里に在り。自ら立ちて王と為す。諸属ちて王と為す。諸属は皆な官長及び王の左右の大臣有り、皆な号して崑崙と為す。

に相当する『神丹經』下の文は、

扶南は林邑の西南三千余里に在り。自ら立ちて王と為す。諸属国は皆君長あり、王は炮到と号し、大国の次王は號して鄱歎と為す。小国の君長及び王の左右の大臣は、皆な号して崑崙と為す。

である。もうひとつ例を挙げれば、おなじく『御覽』卷九八八・磁石の項に、

南州異物志に曰く、漲海^{なんかい}の崎頭は、水浅くして磁石多し。外徼^{がいこく}の人は大舶に乗り、皆な鉄鑠^{てつよう}を以て之を鑠す。此の関に至れ

ば、磁石を以って過るを得ず。

卷七九〇・句稚国の項に、

南州異物志に曰く、句稚は典遊を去ること八百里、江口の西南に有り。東北に向いて行けば、大崎頭に極まる。漲海中に出て、浅くして磁石多し。

とみえ、輯本はむろん別べつに採録している。しかし『神丹經』下によれば、この二条はもともと連続する文であつたらしい。すなわち、

句稚国は典遊を去ること八百里、江日（口の誤り）の西南に有り。東北に向いて〔入り、正しく東北に〕行けば、大崎頭漲海中に出ず。水浅くして慈石多し。外徼の人は船舶に乗り、皆な鉄もて葉す。此の崎頭に至れば、慈石に関はまれて過るを得ず。皆な句稚に止まり、貨易して還る。（一）内は衍文か

ちなみに、インドにあるという磁石の山の話は、古代ギリシアのプリニウスやプトレマイオスによつても記録されており、ひろく流布した。プリニウスの『博物志』II・98には、

インダス河の近くに二つの山があつて、その一つは鉄を引きつける性質があり、いま一つはそれを退ける性質がある。したがつて人が釘を打った靴を履いていると、一つの山の上では一歩ごとに足を地面から引き離すことができないし、いま一つの上では足を地につけることができない。⁽²⁰⁾

プトレマイオスの『地理学』VII（インド）・2には、

なお人の話によれば、マニオライと呼ばれる、十余りの隣接する島々があり、おそらくヘラクレスの石を産するためであろう、鉄釘をつけた船は引き寄せられるということだ。またそこでは人びとは木釘で船を作っている。⁽²¹⁾

もともとこの伝説は、鉄釘を用いないで作られた船を見た航海者たちのあいだに生まれたといふ⁽²²⁾。それをアジア大陸の東端で万震が書きとめたのである。時代ははるかに降るが、十世紀ごろ作られたといふ『千一夜物語』第十四夜の「第三の托鉢僧の話」のなかには、つぎのようなかたちで登場する。

明日になると、私どもは「磁石の山」と呼ばれる黒い岩の山に着くこととございましょう。そして潮は否応なく私どもをその山の方にひっぱって行つて、やがて私どもの船は微塵に粉碎されてしまふでしょう。なぜかと申しますと、船の釘が全部、磁石の山に引き寄せられて飛び去り、山の腹に吸いついてしまふのです。⁽²³⁾

しかし第三に、『神丹經』下の諸国の記述には偽葛洪の加筆も多かった。四字句の序章などを加えて、全体の分量のおよそ半分は偽葛洪の手になった、とわたしは考えている。そのなかで、全体を通して確実に偽葛洪の加筆といえるものに、まず靈藥の原料となる金石の記載がある。

象林（西図） 国は至って丹砂多く、土の如し。

林邑・扶南 扶南の地は朱砂・珍石多し。扶南従り北のかた林邑に至る三千里、其の地は豊饒にして、朱砂・硫黄多し。

典遜 其の国は丹砂・曾青・硫黄・紫白石英を出す。

杜薄 金及び錫・鉄・丹砂土の如し。

林楊 丹砂・硫黄・曾青・空青・紫石英多し。

（師漢 金・玉・硫黄の物多し。）

金玉の類はともかく、鍊金術者でなければ、とりたてて丹砂や硫黄などを記載するいわれはない。これらの記載は、『御覧』巻七八六の林邑国、扶南国、巻七八八の典遜国、巻七八七の林楊国、巻七八九の師漢国の記事にはない。また『神丹経』下の杜薄国の記事のうち、前から三分の二は『通典』巻一八八の杜薄国条の前半ときわめて似通っており、無関係ではありえず、いずれも『南州異物志』にもとづくわたしは考えるのだが、その『通典』にはたんに「金・銀・鉄を出す」とみえ、丹砂の語はない。

たしかに、正史の外国伝などに靈藥の原料となる鉱物の記載がまったくないではない。たとえば『魏書』西域伝・波斯国の条には、朱砂・水銀・雌黄がみえている。しかしそれは四十種に近い貴金屬・宝石・織物・香類などのなかの、むしろ目立たぬ一部にすぎない。唐代には、中国の朝廷や高官に丹砂などを献ずる記事が散見するようになる。たとえば、『新唐書』南詔伝上によれば、貞元五年

（七八九）、南詔王は節度使の韋皋に「黄金・丹砂を贈」ったという。だがこれは、唐代に皇帝や貴族・官僚のあいだに盛行し、多くの悲惨な犠牲者をだした、靈藥服用に乗じたものであった。

いっぽう、鍊金術者たちのあいだには、南方に丹を生ずるという話が伝わっていた。葛洪は「年老いたるを以って、丹を鍊りて以って遐寿を祈らんと欲し、交趾に丹を出す」と聞きて、句厠令と為らんことを求む。……洪乃ち羅浮山に止りて丹を煉る」と『晋書』の伝は記す。第二次広州行の動機である。句厠県、羅浮山ともに広東にある。交趾はヴェトナム北部。偽葛洪のいう扶南などの「生丹の国」が、葛洪伝その他にもとづく創作であるのは、疑いを入れない。

第四に、偽葛洪が近くに置いたのが生丹の国々だったとすれば、遠くに配したのは大道の国々であった。大道すなわち道教の大いなる教えを奉ずるという記述は、まぎれもなく偽葛洪のものである。『南州異物志』を道教化するにあたって、偽葛洪は近国には鍊金術の物質を、遠国には道教の精神をちりばめたのだ。物質から精神への移行の予兆は無倫国にあらわれる。

『神丹経』下の序によれば、無倫は「導仙服食の薬、長生所保の石」がごろごろ転がっている五国のひとつであり、そのもつとも西に位置する。本論にいう、無倫国は、大いなる教えならぬ大いなる道路としての、「大道を有し」ており、

其の地の人は考寿多く、二百年を得る者有り。

と。この記述は一見、序に「此の五国は服用の方を見ず、長延の道を知ること莫し」と述べていることばと矛盾する。というのは、道教徒にとって二百歳とは、養生術の効果的な実践の証しであったからだ。ひとつだけ例を挙げよう。『三国志』魏志注に引く「華佗別伝」によれば、名医華佗は滋養強壯剤の漆葉青黏散^{かん}を服用しており、その製法を弟子の樊阿に授けた。青黏は偽葛洪が月支に産すると書いている萎蕤^{いずい}、和名アマドコロの別名である。『抱朴子』内篇・至理にいう、「漆葉・青葵（黏の誤り）は凡幣の草なり。樊阿^{はん}之を服し、寿二百歳を得て、耳目聰明、猶お能く鍼を持して以って病を直す。此れ近代の實事にして、良史の記注する所の者なり」と。だが、鍊金術を知らぬ無倫の人たちは、道教の実践のゆえにでなく恵まれた自然のゆえに、長寿であったとすればどうか。事実、長生を可能にする風土があると考えられていたことは、あとで述べる。そして、風土的自然は物質を精神に媒介するものとして存在していたのである。

決定的な転換は、丹砂・硫黄・曾青・空青・紫石英の産地ともされた林楊で起こる。『御覽』卷七八七に引く『南州異志』林楊国には「皆な仏を持す」とあったのに、「持仏」を「奉道」に、仏教を道教に改鑄して、偽葛洪は書きつける、「皆な道を奉ず」と。そしてこれをきっかけに、つぎつぎに道教的理念を接木してゆく。

師漢 皆な大道を奉じ、清潔にして法度を脩め、漢家の威儀有

り。是を以て之れに名づけて師漢国と曰う。……但だ仁善を行い、殺生を忍びず。

扈利 大道以て中ず。

斯調 民の専ら^{もっぱ}大道を奉ずること中国人に似たり。言語風俗亦た然り。

大秦 此の国は是れ大道の出ずる所にして、虚を談じ妙を説き、脣理（？）絶殊す。

古奴斯調 此の国も亦た大道を奉ず。

察牢 人民安樂し、国に刑殺無く、唯だ仁義・福德を修むるを業と爲し、甚だ雍雍然たり。

月支 人形は胡なるも絶だ^{はな}潔白にして、礼儀に被服され、子は慈子は孝、法度は恭卑^{こうひ}しく、坐して蹲踞せず。……或は大道を奉ずる者有りて中分せし地も、亦た方二万里なり。

師漢・斯調・察牢といった国名が著者の想像力をかきたて、叙述を導いている気配がここにはある。師漢国のばあいにはっきりしている。思いがけなく発想は単純なのだ。

第五に、他書、したがって輯本に、対応する佚文がないばあいには、『南州異物志』の佚文とされるもの以外の関連する記述を参照するほかはないが、どこまでが万震の文でどこからが偽葛洪の加筆か、判断はずつとむずかしくなる。そのなかでも幸運な杜薄国の例

をとりあげよう。

杜薄は、閼婆国の名なり、扶南の東の漲海中の洲に在り。扶南従り船行し、直截に海を渡り、数十日ばかりにして乃ち到る。其の土は人民衆多^おく、稻田を耕種す。女子は織りて白暈花布を作る。男女白^{しろ}く、皆な衣服を着す。土地は饒^こえ、金及び錫・鉄あり〔丹砂土の如し〕、金を以て錢貨^づを為る。五色鸚鵡・豕・鹿・豢[?]・水牛・犬・羊・雞・鴨を出し、犀・象及び虎・豹なし。〔男女温謹にして、風俗は広州人に似たり。〕

〔 〕で括った文は、すでに述べたように、偽葛洪の加筆にちがいない。

これに対応する杜薄国の記述は、さいわいにして唐の杜佑（七四三—八一二）の『通典』（八〇—）巻一八八に見出される。

杜薄国は、隋の時に焉^これを聞けり。扶南の東の漲海中に在り、直ちに海を渡ること数十日にして至る。其の国の人 貌は白皙にして、皆な衣服を有す。国に稻田有り。女子は白暈華布を作る。金・銀・鉄を出し、金を以て錢を為る。雞舌香を出す。含む可く、香を以て衣服に入れず。雞舌は其の木^た為るや、氣辛にして性厲、禽獸至る能わず、故に未だ其の樹を識る者有らず。華熟して自ら零^おち、水に随いて出でて、方^ほめて之を得る。杜薄州は十余国有り、城は皆な王を称^たす。

出典こそ明示されていないものの、この文章が『南州異物志』にも

とづくのは、まず間違いない。それを例証するのが無倫である。

『通典』巻一八八に、

無論国は、隋の時に焉^これを聞けり。扶南の西二千余里に在り。其の国は大道の左右に……

『御覽』巻七九〇には、

南州異物志に曰く、無論は大道有り、左右に……

と省略されているが、『神丹經』下は、

無倫国は扶南の西二千余里に在り。大道有り、左右に……

と里程の記述をとどめている。問題は、『南州異物志』からの引用とおぼしい『通典』の文にかならず記されている、『隋時聞焉』という表現である。『隋書』経籍志には、万震は吳丹陽太守とみえるが、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志はいずれもたんに万震とします。唐の杜佑はあるいは『南州異物志』を隋代（五八一—六一八）の著作と考えていたのだろうか、それとも隋代の書に引かれた『南州異物志』を見たのだろうか。

杜薄にもどうう。『神丹經』下の文には『通典』にみえる雞舌の話はないが、終章の四字句の文に「雞舌の芬羅なるは、杜薄に生ず」とあり、物産志に記載されていたにちがいない。事実、『御覽』巻九八一にいう、

南州異物志に曰く、雞舌香は桂蘇州に出ず。云えらく、是れ草花なり、香を口に含む可し、と。

『香要抄本』・『香葉抄』（『続群書類従』巻三十一上）は桂蘇を杜薄に作っている。これは明らかに『御覧』が「杜薄」を「桂蘇」に誤写したのである。

『通典』の文の雞舌香にかんする記述は、諸国志の文に物産志のそれを接合したものだった。これで『南州異物志』の雞舌香の条をいっそう完全なかたちで復元できたことになる。同時に、『神丹経』下の五色鸚鵡から虎豹にいたる部分、おそらくは『通典』が雞舌香を入れる代りに削除した部分も、『南州異物志』のものと文である可能性が高くなる。つまるところ、杜薄国の条に偽葛洪が筆を加えたのは、あらかじめわたしが指摘した「丹砂土の如し」と「男女温謹にして、風俗は広州人に似たり」だけだった、言い換えれば、生丹と大道にかかわる記述だけだった、という結論に落着く。これを加筆の二大原則といってよからう、すべての加筆をこの原則によって処理することはできないとしても。

第六に、ここでつけ加えておきたい。呉の孫権のとき、康州刺史呂岱は中郎の康泰と宣化従事の朱応を親善使節として扶南に派遣した。康泰の『呉時外国伝』・『扶南土俗伝』、朱応の『扶南異物志』などは、その見聞にもとづく報告書である。その『呉時外国伝』に、部分的に『神丹経』下の杜薄の文と共通する表現がみられる。

扶南の東に漲海有り、海中に洲有り、五色鸚鵡を出だす。曾て其の白き者を見るに、母雞の如し。（『御覧』巻九二四）

諸簿国。安子は織りて白暈花布を作る。（『御覧』巻八二〇）
これだけなら事実の記述のたんなる類似にすぎぬといえようが、あきらかに康泰の書によったと思われる国が二つある。歌宮国の蒲羅中と扈犁国である。

『神丹経』下は歌宮国をつぎのように記述する。

歌宮国は、句稚の南に在り、一月ばかり行きて乃ち其の国に到る。又た湾中に大山林有り、海辺に迄るを、名づけて蒲羅中と曰う。殊民有り、尾は長さ六寸、好んで人を啖う。（体を論ずれば、類を人獣の間に處く。純に人と為すと云わば、則ち尾有りて且つ人を啖う。純に獣と為すと云わば、頭に載せて倚行す。尾は獣に同じく、而して行は人に同じ。形由りして之を言え。ば、則ち人獣の間に在り。）末は黒きこと漆の如く、齒は正に白銀、眼は正に赤く、男女裸形にして、衣服無し。父子・兄弟・姉妹、露身にて対面・同臥す。（此れは是れ歌宮国の夷人のみ。別に自ら佳人有り。）

『御覧』巻七九〇にいう。

南州異物志に曰く、歌宮は、句稚の南に在り、一月ばかり行きて到る。其南の大湾中に州有り、蒲類と名づく。上に居人有り、皆な黒きこと漆の如く、齒は正に白く、眼は赤く、男女皆な裸形なり。

蒲類は蒲羅、『通典』は薄刺に作る。⁽²⁵⁾『南州異物志』にはない尾と食

人の慣習を記録したのは、康泰の『扶南土俗伝』であった。『御覧』巻七七八七に、

呉時、康泰 中郎と為り、表して扶南土俗を上して曰く、拘利コリの正東は、行くこと崎頭に極まる。海辺に居人有り、人は皆な尾を有す、五、六寸なり。名づけて蒲羅中国と曰い、其の俗は人を食う。

おなじく巻七九一に、

扶南土俗伝に曰く、拘利の東に蒲羅中人有り、人は皆な尾を有す、長さ五、六寸、其の俗は人を食う。

とあるのが、それだ。『神丹経』下との表現の類似は覆いがたい。偽葛洪は『扶南土俗伝』によって『南州異物志』を補ったと考えていいだろう。わたしが「」でくくった部分は、その際の注記に類する加筆にちがいない。

扈利国については、『神丹経』下はこう書いている。

扈利国は、古奴斯調の西南、大湾中に入ること七、八百里なり。大江有り、源は崑崙の西北に出で、東南に流れ、大海に注ぐ。江口より西行すれば、大秦国を距つること万余里、大船に乗り、五、六百人を載せ、七帆を張り、時風一月にして乃ち大秦国に到る。(大道以って中す。)

『御覧』巻七九〇はただ、

扈利国は奴調洲西南の辺海に在り。

と記すにすぎない。ところが、『水経注』河水条に引く「康泰扶南伝」に、

迦那調洲西南よ従り大湾中に入ること七百里、乃ち枝扈黎大江口に到る。江口を渡りて逕たちに西行すれば、大秦に極まる。

『御覧』巻七七一に引く「呉時外国伝」に、

加那調州よ従り大(伯)船に乗り、七帆を張り、時風一月余にして及ち(秦)大秦国に入る。(一)は衍字

とあり、この三条の記載を綴り合わせたのが『神丹経』下の文だという饒宗頤の指摘は、まず動くまい。⁽²⁶⁾「大道以って中す」は、むしろ偽葛洪の加筆である。このいささか唐突な一句は大秦に付くのか、それとも扈利について述べたのか、疑問が残るが、ここでは一応、扈利の記述とみなしておく。衍文の可能性も十分にある。

偽葛洪は『南州異物志』に依拠して、あえていえば『南州異物志』を種本にして、『神丹経』下を書いた。ほかの国については、他書を利用した形跡がない。序の冒頭に、「人の南方の異同を撰し、外域の奇生を記すを見」た、と書いているにもかかわらずである。それなのにいったいなぜ、歌宮と扈利にたいしてだけ、康泰の著作を引いて記述を補強しようとしたのであろうか。

偽葛洪の諸国志の構成に注目しよう。歌宮は林楊の前に位置している。林楊は最後の生丹国であると同時に、最初の大道国でもある。林楊の後には加陳がくる。

加陳国は、歌宮の西南に在り。海辺国にして、海水漲浅す。諸国の梁人有り、常に行人を伺い、財物を劫掠す。賈人は当に輩旅を須ちて乃ち敢て行くべし。

『御覽』巻七九〇引『南州異物志』は、海辺国以下の記載を欠く。漲浅は遠浅をいうか。梁は強梁、饒宗頤の解釈にしたがう。²⁷『老子』第四十二章に、「強梁者は其の死を得ず」、兇暴な人はろくな死にかたはしない、とある。生丹の国から大道の国への転回点に立つ林楊を、半人半獣の棲息する歌宮と強盗団の跳梁する加陳が挟む。この構造をつくりだすためには、是非とも半人半獣の記事が必要であった。それを偽葛洪は康泰の書に見出したのである。この構造がなにを意味するかは、最後に分析する。さしあたって強調しておきたいのは、偽葛洪の諸国志が『南州異物志』のいささか丹念な敷衍しなどではなく、十分に計算され意図的に構成された、一種の創作であるということだ。

いっぽう、扈犁のほうは斯調の前に置かれており、斯調およびそれと一体を成す隱章の兩國を経て、大秦へ続いている。大秦すなわちローマ・オリエントこそ、マスペロがそこだけをとりだして一篇の文章を草したように、偽葛洪の諸国志のハイライトであり、扈犁には、康泰の記述を借用することによって、大秦への入口という輝かしい位置があたえられているのだ。だからそこは、世界の中心であり高みである崑崙から流れ出た大河が大海に注ぐ場所、さらには

「大道以つて中す」ところでなければならなかったのである。だが、その構成の意味をさらに明確にするには、あらかじめ斯調国に目を通しておく必要があるだろう。

話をもとに戻せば、第七に、他書に『南州異物志』の佚文があるからといって、偽葛洪の創作の検証にかならずしも厄介さが減るわけではない。その例に斯調国を挙げることができる。冒頭にいう、斯調国は海中の洲の名なり、歌宮国の東南三千里ばかりに在り。其の上に国王有り。〔民の専ら大道を奉ずること中国人に似たり、言語風俗亦た然り。〕城郭・市里・街巷を治む。土地は沃美〔人士は済済〕なり。多く珍奇・金・銀・白珠・瑠・水精及び馬珂を出す。……

『御覽』巻七八八には、南州異物志に曰く、斯調の海中の洲の名なり、歌宮の東南三千里ばかりに在り。上に王国・城市・街巷有り。土地は沃美なり。とある。『神丹經』下の「人士済済」はいかにも加筆だが、産物は『南州異物志』の記載とみていいだろう。とくにこれらの物を加筆するいわれはないからだ。

『御覽』はつづけてつぎの一条を載せている。火浣布伝説である。南州異物志に曰く、斯調国に又た中洲有り、春夏に火を生じ、秋冬に死す。木有り火中に生じ、秋冬に枯死す。皮を以いて布を為る。

『史記』大宛伝・正義は「万震南州志」を引いている、

海中の斯調州は、上に木有り、冬月往きて其の皮を剥取し、續いで以って布と為す。極めて細なり。手巾は数匹に齊しく、麻焦布と異なること無し。色は小しく青黒なり。若し垢汚して之を浣わんと欲すれば、則ち火中に入れば便ち更に清潔なり。世に之を火浣布と謂う。

『三国志』魏書・三少帝紀の景初三年二月、西域が火浣布を献じた記事にたいする裴松之注の引用は、火と木についてさらに詳しい。

異物志に曰く、斯調国に火洲有り、南海中に在り。其の上に野火有り、春夏に自ずと生じ、秋冬に自ずと死す。木有り其の中に生じて消えず、枝皮更めて活く。秋冬に火死すれば、則ち皆な枯瘁す。其の俗は、常に冬其の皮を采りて以って布を為る。色は小しく青黒なり。若し塵垢之れを汚せば、便ち火中に投ずれば、則ち更に鮮明なり。

火浣布は鉱物性繊維石綿、アスベスト。アスベストといえどもは有害物質と怖れられるが、かつてはいくつもの伝説を生んだ不可思議な布であった。平賀源内が、古い文献の記載を集め、またみずから実験的制作を試みて、『火浣布説』『火浣布略説』（一七六五）を著したことはよく知られている。斯調国は、北魏（三八六―五三四）の楊衒之の『洛陽伽藍記』巻四にも、「火浣布を出す。樹皮を以って之を為る。其の樹は火に入るるも燃えず」とあるように、火

浣布の産地としてつとに有名であった。

ところが、『神丹経』下の後続する文は火浣布の話ではない。

又た火珠有り、大いさ鵝鴨の子の如し。之れを視れば氷の如く、手中に著くれば洞洞として月光の人の掌を照すが如し。夜視るも亦た然り。火珠を以って白日 日に向け、以って艾を布きて之に属づけ、其の下に承くれば、須臾にして光火珠中従り直に下ること、漉漉として屋雷の物に下るが如きを見る。勃然として烟発し、火乃ち然ゆるは、猶お陽燧の火を取るが如し。其の陰に向けて水の出ずること有る者は、名づけて夜光珠と曰い、陰合の水を取るが如し。火珠・夜光俱に一の如きに至っては、但だ其の精得る所の水火を以ってして、其の名を異にするのみ。この記述からわかるように、火珠は点火用の水晶のレンズである。これを書いたのは、いったい万震であろうか、それとも偽葛洪であろうか。

確実に水晶レンズといえるものが歴史書に記載されたのは、唐代に入ってからである。ほかに火苻・火苻珠と呼ばれるものがあり、ときに火珠と混同されたが、そちらは雲母であった。『旧唐書』南蛮伝・扶南国の条にいう、

（貞観）四年（六三〇）、其の王范頭黎使を遣して火珠を献ず。大いさは雞卵の如く、円く白く皎潔にして、光照すること数尺、状は水精の如し。正午に日に向け、艾を以って之を承くれば、

即ち火燃ゆ。

貞觀二十三年（六四九）にも、扶南は「又た使を遣して象牙・火珠を献じ」ている。『新唐書』南蛮伝下は、婆利を火珠の産地と記載する。

婆利は、環王（扶南）の東南に直り、交州自り海に汎かび、赤土・丹丹の諸国を歴て乃ち至る。……火珠多く、大なる者は鶏卵の如し。円く白く、照らすこと数尺、日中艾を以いるに珠を藉れば、輒ち火出ず。

たしかに、話としてはすでに西晋代には伝わっていた。張華（二二三—三〇〇）は『博物志』卷四・戯術にこう書いている、「取火の法は、珠を用いて火を取るが如き、多く説く者有るも、此れ未だ試みず」と。しかし、たしかに見たという記録はない。

わたしの考えでは、万震の書に記されていたのは火浣布の話であった。それは『南州異物志』の佚文によって証明されるだけでなく、時代を前後して書かれた多くの外国志の佚文によっても傍証される。逆に火珠にはそれがない。こうしたすべてが、火珠の話は偽葛洪の手に成ることを示唆している。わたしの推定が成り立つならば、そしてスタンがいうように『神丹經』下が六世紀前半の著作であるならば、それは『唐書』にあらわれた日付けより約一世紀遡る、火珠についての最初の具体的な記述ということになる。それにしても、いったいなんのために、偽葛洪はありふれた火浣布の話を珍らしい

火珠の話に置き換えたのだろうか。それを解く手掛りは、夜光珠の話にあたえられている。

偽葛洪の夜光珠の話はあきらかに混乱している。陽隧と呼ばれる取火器があった。青銅製の凹面鏡である。太陽から火を取る陽隧はつねに、月に向けて水を取る方諸と対にして語られる。だが、方諸とはいかなる物か、あるいは冷たい表面に空気中の水蒸気を凝結させて水滴を集める道具かと思われるが、その形や材質はいっこうにはつきりしない。⁽²⁹⁾偽葛洪が陰合という聞きなれない用語で呼んでいるのが、その方諸である。錬金術者の用語なのかも知れぬ。偽葛洪によれば、夜光珠は火珠にはかならず、方諸式に取水に使うか、陽隧式に取火に用いるかによって、その呼び名が異なるにすぎない。

夜光珠とはなにか。『御覽』卷八〇三に引く東晋の郭義恭の『広志』にいう、

又た明珠有り、（夜）光と称す。大いさは経寸、或いは圜二寸以上、黄支に出ず。至円珠有り、平地に置けば、終日停まるを得ず。（夜字は『初学記』卷二七引によって補う）

またべつに明月珠と称するものがあった。『淮南子』汜論訓の「明月珠は、類無き能わず」に注して、後漢の高誘は「夜光の珠は月光に似たる有り、故に明月と曰う」と述べている。明月珠はときに明珠と略称された。明月珠が海産だと証言するのは、『初学記』卷二七に引く劉宋の沈懷遠の『南越志』である、「海中に大珠有り、

明月珠・水精珠なり」。夜光珠も明月珠も、要するに、直径一寸にも達する大きな真珠の類であった。偽葛洪もそれを知らぬはずはない。

だが、もし偽葛洪のように、取火の道具としての火珠と対をなす取水の道具を夜光珠と呼ぶということにすれば、火珠を夜光珠に用いてもすこしもかまわない。それに火珠を夜光珠と同じ物とみなしておくほうが都合がいい理由もあった。大秦が夜光珠の産地として有名だったからである。『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝の裴松之注に引く魏の魚豢の『魏略』西戎伝は、金・銀にはじまる多くの産物のなかに、「明月珠・夜光珠・真白珠」を列べて挙げている。夜光とはもととも月を指すことばでもあり、名称からみて、この三種は色や輝きの微妙な違いによって識別されたのであろう。正史の外国伝は『魏略』の記述をほぼ踏襲する。『通典』卷一九三は「夜光璧・明月珠」と書いているが、夜光璧もまた古い名称であった。そして偽葛洪によれば、大秦国王は扶南の使者に「紫金夜光五色玄珠」を下賜するのである。

『神丹経』下の斯調国の記述は火山の話で結ばれている。

斯調洲上より東南に望み、夜視れば、常に火光有りて、天を照すこと大治を作すが如きを見る。冥夜に其の火光の照を望むや、云えらく、是れ炎洲の所在なり、火山有り、冬夏に火光有りと。

その位置からみて、ここにいう炎洲は火浣布を産するという火州と同じ場所にちがいないが、火浣布説話から自由になっている分だけ、活火山の記述としてははるかにリアルであり、正確である。この火山を介して、偽葛洪の筆は隠章国へと進む。

5 発明された国——隠章

隠章国は何気なく読み過ごしてしまいそうな、変哲もない僻遠の地である。

隠章国は、斯調から三、四万里ほど離れており、そこまで行く者はめったにいない。ここ数十年のあいだ、炎洲の人がたまに船舶に乗って斯調に行くだけだという。火珠はこの国が売物に所有しているものであり、そこで斯調の人がそれを買いたるのである。また丘陵や水田、魚・肉・果物・穀物・桑・梁・豆・芋などがある。また麻厨木がある。その木は松に似ており、その皮や葉を煮て、汁を取って食物にし、煮つめて食べる。その味は甜く、なんともいえないいい香があり、食べると飴のようなものである。そのうえ人の気力を養わせる点で食物に近い。

斯調の火珠と、斯調洲上から遠望される火山の炎洲と、そしてこの話をつなげば、火珠は炎洲でとれ、炎洲の人がそれを斯調に売りに行く、という物語を偽葛洪が描いているのがわかる。その炎洲に偽葛洪は隠章国という名をあたえたのである。

火珠のほかに隱章の特産物とされる麻廚木は、『南州異物志』では「斯調に生ず」とされるものであり、四言韻語と散文注とから成るその全文は、すでに前に引用した。あらためて四言韻語の文を訳すれば、

摩廚という木があり、斯調に生ずる。こつてりした汁をたっぷりふくみ、膏のような光沢があり、香が馥郁とたちこめ、煮つめることができる。かの州の人びとは、よい香として大切にしている。

注には「花木志」を引いて、煮つめて食物にすると中国人の用いる油のようなおいしい香がするという。偽葛洪の文章は、説明をすこしつけ加えたものの、大意は生かしている。ただ、道教の「養気」の概念を使って「人をして気を養わしむ」と最後をしめくくったところは、世界の道教化への志向をかいまみせるものであった。だが、それだけではない。

隱章という国名はかつて記録されたことがなく、いかなる文献にも登場しない。なによりも『南州異物志』にもともと隱章国はなかった、と考えるべき有力な証拠がある。それは偽葛洪が書いた『南州異物志』の目次にあたると覚しい序章のなかに、ひとつだけその名がみえないことだ。どうやら偽葛洪は、よく知られた火山の話と、『南州異物志』にみえる摩廚木の話と、みずから書き加えた火珠の話と、その三本の話の糸から、隱章という国を編み上げたいらしい。

のみならず、そもそも「隱章」というのが、道教文献にしかあらわれない特異な語なのである。

「隱章」もしくはそれと同じ意味をもつ「隱彰・隱障」の語の用例が、いまわたしの手元に四例集っている。まず『太清金液神丹經』巻上の、靈藥をつくる長い操作のなかに、つぎのような一節がある。

桑葉十斤を雲母上に布着し、酉時に清水三斗を以て桑葉上に灑ぎ、既に畢れば、丹砂を冥出し、器を桑葉上に露し、其の蓋を発け、隱彰日欲出還丹砂、蓋して室中に内る。

実をいえば、一連の操作全体の意味がわたしにはよく理解できず、引用した部分では冥出とはいったいどうするのか、「隱彰」にはじまる一句にいたっては読みかたもわからない。鍊金術書につきものの難解さである。

他の三例は上清派（茅山）道教の中心經典であり、梁の陶弘景（四五二—五三六）が最終的に編集して今日に伝わる、『真誥』（『道藏』太玄部）のなかに見出される。まず卷三（一葉裏）に、

（靈照）夫人の青玉色綬を帯びること、世人の帶章囊の状の如し。隱章当は長さ五丈許、大いさは三、四尺許。

綬は印章をつけておく組紐。隱章当とはいかなる物か詳かにしないが、これはまず無関係だろう。

卷十一にでてくるつぎの二つの例は、いずれも道教の聖地茅山の連山中の、道士が「屋室・静舍」を構えて住むにふさわしい山につ

いて述べた『真誥』経文にたいし、陶弘景がつけた注のなかに見出される。経文にいう、

上古、此の山を名づけて岡山こうざんと為す。孔子福地記に云う、岡山の間に伏竜の郷有り、以って水を避け病を辟しりぞけ長生す可し。

陶弘景はこう注する。小茅山の東北に大横山という長くて大きな山がある。本の名は鬱岡山。山は今日のいわゆる伏竜の東にある。世人は伏竜地とか死蛇岡とか呼んでおり、地形を彷彿させてくれる。

又た其の長くして高益なるを見て、呼びて長隠と為す。隠は音、於観の切。其の言は隠障す可しとなり。此の岡山は細石多しと雖も、亦た居す可きのみ。(九葉裏)

隠の音はオン、その意味は「隠障」できるということである。

もうひとつの経文は、

大茅山中に茅山相連なり、長阿中に連石有り、古時、名づけて積金山と為す。此の山中に甚だ金物多く、其の処に宜しく人は住むべし。水有る処を索もとむ可く、屋室・静舎を為つくりて乃ち佳し。……快く丹を合し、以って上道を修む可し。(十一葉表)

陶弘景の注によれば、ここはかれがいま住んでいるところの東側の丘陵であり、奇岩絶壁が聳え、多くの洞穴があり、真仙が授けた金物に富み、風がひゅうひゅうと鳴っている。かたわらに湧泉があつて、一年中清んだ水が流れ、冬は温かく夏は冷たく、早にも涸れることがない。

又た此の嶺を渡れば、東南に一石穴水有り、東流して極めて好し。其の処は隠障し、甚だ丹を合す可し。……正に患うは徑路を去ること近く、車声人響、殆ど相聞こえんと欲す。今若し此の道を断たば、復またとは車声人行を聴かず、便ち是れ第一の処なり。(十一葉裏)

霊薬を調合するのに適した場所は、『太清金液神丹経』巻上に「山林石室、幽静避隠、無人の地に在ることを得んと欲し、犬吠人声を聞くを欲せず」というように、人里離れた山中の、奥まった、地形や植生に障さまたげられて人や獣がめったに近づかない、湧水にめぐまれた清流沿いの地であつた。そういう土地が「隠障」しているといわれたのである。文字通りには、奥まっついて人を遠ざけている、という意味であらう。

ひるがえって隠章国はどうか。斯調から三、四万里離れ、そこまで航海する人はめったにいない。ここ数十年のあいだに、逆に炎洲すなわち隠章国から斯調へ行った人がたまにいただけという。しかもそこには火珠という珍奇な物を産し、養気の効用において食物に匹敵する木まである。死をもたらす穀物を摂らない、いわゆる辟穀の実践にとっても格好の地ではないか。もはや明らかであらう、「隠章」国は「隠障」国であつた。『真誥』にみえた隠障の地は、「孔子福地記」という書名が示唆しているように、洞穴を通して福地へ、「真仙」たちの王国へとつながっていた。偽葛洪の諸国志に

おいては、隱章国のつぎに大秦、ローマ・オリエント、すなわち道教徒の理想郷がくる。ここに構造のまぎれもない相同性がある。この相同性こそが、偽葛洪に隱章する国を發明させたのであった。

つけ加えておくなら、炎洲を理想郷の一隅にくみ入れた道教徒が、偽葛洪のほかにもうひとりいた。『十洲記』の著者である。前漢の武帝が西王母から、八方の大海中に人跡未踏の十洲があると聞き、東方朔にその所在や産物を尋ねる。それに応えて東方朔が書いたという形式をとる『十洲記』は、仙人たちの住む国の自然の記述に終始する。たとえば、

瀛洲は東大海中に在り、地は方四千里 大抵是れ会稽郡に対し、西岸を去ること七十里なり。上に神芝仙草を生じ、又た玉石有り。高さは千丈に且し。泉より出るは酒の味の如く、之を名づけて玉醴泉と為す。之を飲むこと数升にして、輒ち酔いて人をして長生せしむ。洲上に仙家多く、風俗は吳中に似て、山川は中国の如し。

炎洲も十洲のひとつである。

炎洲は南海中に在り、地は方二千里、北岸を去ること九万里なり。上に風生獸有り、豹に似て青色、大いさは狸の如し。

ほとんど不死身といってもいい獣だが、その腦を菊花にまぜて服すると、寿命は五百年になる。

又た火林山有り。山中に火光獸有り、大いさは鼠の如く、毛は

長さ三、四寸、或は赤く或は白し。山は三百里ばかり、晦夜に嘗て此の山林を見れば、乃ち是れ此の獸光照し、状は火光の如く相似たり。其の獸の毛を取り、以って緇^{つむ}いで布と為す。時の人は号して火流布と為す。

もうひとつの火流布伝説である。汚れたら火で流うことにむろん変りはない。火に流われて蘇る火流布は、いうまでもなく不死なるものの象徴なのだ。最後にいう、「亦た仙家の居処多し」と。あとでみるように、偽葛洪もまた神草木の生える長生山の話を書くだろう。偽葛洪は隱章国を發明しただけでない。さらに三つないし四つの話を創作して、それを三つの国に配置した。ひとつは典遜国の記述のあとにつけ加えた、船の速さと里程についての問答、ひとつは大秦国の条に挿入した、風俗・道德の話と訪れた中国商人の話、ひとつは罽賓国の記述に説明的に書き足した、不思議な草木の話である。大秦国の話をとりあげたマスベロは、それを小さなコントと呼んだ。かれにならって、わたしもそれらを三つのコントと名づけることにしよう。

6 第一のコント——船の速さ

典遜国の条につけ加えられたコントCIをまず全訳しよう。『南州異物志』の里程を船の速度によって根拠づけようと試みたものだが、現存するテキストの数値にはあきらかな乱れがある。

C I

典遜は日南から二万里あるが、扶南は林邑から三千七、八百里にすぎないようにみえる。どうしてそれがわかるか。船舶が（日南の）寿靈浦口を発ち、風に合せて日も夜も帆を下ろさなければ、十五日で典遜に着く。一昼夜に二千里を帆走するのである。

問「いま長江の舟船は、高いマストに広い帆を張り、流れにまかせ風の吹くほうへ下って、一日にやと三百里行くだけです。あなたはいま海上で一昼夜に三千里行くと言われましたが、嘘ではありませんまいな。」

答「わたしは昔なんども尋ねたことがあるのですが、船舶は四枚の帆を高く張ってこのように操作するのであり、当然行くことができると言うのです。ある日、試しに（舷側から）物を水に投げてみますと、わずか一息のあいだに百歩の距離を通り過ぎました。そこから推論しますと、鹿を追いかけるよりも速く、ほとんど馬を走らせるようなものです。馬には千里を走るものがあり、それによって（船の速さが）わかります。そこで千里前後を用いているのです。」

このコントのなかでもっとも注目されるのは、船の速さの測定法である。敵敦然^{イェドゥンシェ}は、三国時代に呉の海船が南海へ航行した経験にも

とづく『南州異物志』の記載として、この一節をとりあげた。それによれば、船首から木片を海中に投げて同じ速さで船尾まで歩き、その時間から船の速さを割り出すこの測定法は、明代まで用いられ、時間は香時計で測ったという。⁽³⁰⁾線香の燃えた長さや本数で時間を読む時計である。偽葛洪の記述には「俯仰一息の頃に、以って百歩を過ぐ」とあり、この文学的な表現では百歩に要した時間を割り出しようがない。ただ、もし推測がゆるされるとすれば、一定の呼吸数のあいだに何歩歩くかによって速さを決めていた可能性がある、ということだろう。

一八五〇年のことだが、海面に木片を投げて船の速度を測る方法について、マドラスの船長コングレヴはこう述べている。

以前からの習練によって、土地の船乗りはその歩行速度を知っている。言い換えれば、いろんな速さで歩いて一時間に何マイルになるかを言えるように訓練している。船乗りは船尾（船首の誤り）に立って木切れを水中に投げこみ、浮かんで去ってゆく木切れに歩調を合わせて船尾のほうへ歩いてゆく。そのときの歩行速度を思い出せば、船の進行とかならずや一致しているはずである。⁽³¹⁾

このやりかたが歴史的にどこまで遡れるか、わたしは詳かにしない。しかし、船の速度を正確に測るにはこの方法しかないのだから、インド洋の航海術が陸地を見て進む沿岸航海から眼をさえぎるもの

ない遠洋航海へと飛躍したときには、この方法が採用されていたにちがいない。そして遅くとも六世紀までには中国の航海者に伝えられていたことを、この問答は立証している。言えるのは、残念ながらそこまでである。

もうひとつ、船の速さを推測する比較の基準に千里馬が用いられている。偽葛洪の記述を文字通り信ずるなら、「俯仰一息の頃」に百歩を全速力で駆け抜けた、それが千里馬の速さに匹敵する、ということになる。そのことがすでに信じ難いことから、検討に値しないといえ、千里馬の速さとはいかなるものか、確かめておくのも一興だろう。千里馬の故事は『史記』趙世家にみえる。繆王が千里馬を走らせて徐偃王を攻撃し、勝利を取めたというのである。千里馬といえは速い馬のたんなる形容と思いがちだが、実際に一日に千里を走る馬があった。後漢の衛宏の『漢旧儀』によれば、御璽を押した詔勅を奉持する使者は駅伝に乗る。「其の駅騎や、三騎もて昼夜を行き、千里を行くを程と為す」、三頭の馬を乗り継いで一日に千里を走るのがきまりであった。千里馬とは駅伝の速馬のような馬を指すと考えておこう。前漢までの一里、三〇〇歩、四〇五メートルによって換算すると、時速は一六・八七五キロメートル。船の速さにすると、一海里は一八五メートルだから、九・一ノット強になる。

コントにあらわれるほかの数値のなかで、偽葛洪の航海の経験に

裏づけられていると思われるのは、「扶南は林邑を去ること三千七、八百里に過ぎざるに似たり」という、その距離である。扶南の条には、「扶南は林邑の西南三千余里に在り」、「扶南従り北のかた林邑に至る三千里」とみえるが、『水経注』温水条に引く竺芝の『扶南記』は、「扶南は林邑を去ること四千里」といい、「水陸道」と付記する。水行と陸行あわせて、たかだか三千七、八百里というのは、おそらく妥当な数値であつたらう。

それをのぞけば、誤写その他いかなる理由によるにしろ、ほかの数値は検討に値しない。すでに述べたように、偽葛洪は象林から扶南まで「日を積ぬること旬に倍す」といい、日南寿靈浦から扶南まで「昼夜住まらざること十余日」と書いていた。三千七、八百里の距離を二旬に近い十数日で航海したのである。ところがここではいきなり、二万里ある典遜まで十五昼夜で航行するという。いま『南州異物志』と北魏の楊街之の『洛陽伽藍記』巻四・永明寺の条にみえる、関連する里数と旅行に要する日数をぬきだして対比してみよう。

南州異物志 洛陽伽藍記

林邑—扶南 三〇〇〇余里 一月

扶南—典遜 三〇〇〇余里 三〇日

典遜—句稚 八〇〇里 一二日

句稚—歌宮 一月ばかり 一月

四つの行程のうち三つまで、数値は照応している。コントの数値はそれとの開きが大きすぎる。

大型帆船の速さを力説し、遐外の国は決して航行不能でないことを示そうとしたコントだが、残念ながら現存するテキストは、当時の航海技術についてなにも確実な知識を提供しない。ただ船の速さの測定法だけが、このコントにわずかにリアリティーをあたえているにすぎない。

7 第二のコント——ローマ・オリエント

大秦国の記述はほかの諸国にくらべればかなり長い。それはつぎのような構成をとる。

大秦国は古奴斯調の西四万里ほどのところにある。土地は三万里四方、最大の国である。〔CII A〕。海のはとりから大河を七千里あまり入ると、その国にたどりつく。天下の珍宝を産出し、家屋はみな珊瑚で柱をしつらえ、瑠璃で塀をしつらえ、水晶で階段をしつらえている。〔CII B〕。

『史記』大宛列伝・正義に、

万震南州志に云う、大家屋舎は、珊瑚を以って柱と為し、琉璃を牆壁と為し、水精を礎^{そせき}と為す。

という。これ以外に『南州異物志』の大秦条の佚文は残っていないが、それ以外の記述も万震の文にもとづくものとみておいていいだろう。この短いものと文にCII A、Bの二つの比較的長いコントがつけ加えられ、大秦国は道教徒のユートピアとして描き出されるのである。

CII A

はなやかな人士のかぶる角巾が路を埋め、風俗は長安人を思わせる。この国は人の踏み行うべき大いなる教え（大道）の現われたところであり、虚無を論じ玄妙を説き、口にする道理（脣理？）はとりわけすぐれていて、中国の人たちが妄言とも称されるものをしやべるのとは違う。道士たちが並んで歩き、上古の風趣がある。奴婢を置かず、天王や王妃であっても、みずから神に供える穀物の田を耕し、手ずから桑をつみ縦糸を張る。人を使うには道理にしたがい、人を観るには義理にしたがい、死刑や肉刑をおこなわず、刃物による殺戮と処罰を避けている。人民はおだやかで仲睦まじく、みんなたいてい長生きである。風土はすがすがしく、寒くもなければ熱くもない。士人と庶民は功績や地位を譲りあい、国に兇悪な人はいない。このように教えの力に導かれた、君子の深奥なる界域なのである。罪過と幸福のけじめを明らかにし、万人にその教化を遵奉させたのは、やはり大秦国の人にはじまり、教えを尊んで八方の極遠の

地にそれを示したのも、やはり老子が流沙の地に入って胡人を教化したようなものである。

大秦国にユートピアを託したのは、なにも『神丹經』下がはじめではない。三世紀の著作である、魏の魚豢ぎょかんの『魏略』西戎伝では、理想国にかんするさまざまなユートピアの要素が集中的に大秦に投影されている。白鳥庫吉が証明したように、それらは『書經』に描かれた堯・舜・禹三代の治や『周礼』の理念を実現しようとした新の王莽の試み、あるいは漢の武帝から唐の則天武后にいたる幾人かの帝王たちの施策に表現された政治の理想と共通する、ユートピア的な記述であつた。³²⁾

たとえば、その国には恒久的な王は存在せず、国に災異があれば、ただちに更迭して賢人を王に立てる。人びとは背が高く、公正で、胡服を着ているが中国人に似ており、中国人の一別枝だと自称している。中国とおなじく郵駅の制度があり、十里に一亭、三十里に一置と定められている。王宮は五つあり、王は早朝に一宮へ行つて政務をとり、その夜はそこに宿つて、あくる朝べつの一宮に赴き、五日で一周する。三十六将を置いて政務を合議するが、一将が欠席しても会議は成立しない。王が外を巡回するときには、従者が皮袋を持ってつきしたが、直訴する者があればその文書を袋のなかに入れておき、王宮に還つて処理する。王宮の柱や器物は水晶で作られ

ている。この国は金・銀をはじめとする金属類や、明月珠・夜光珠・真白珠・虎珀・珊瑚・流離（瑠璃）・琅玕・水精（晶）などの宝石類、その他多くの珍貴な物を産出する。大秦のこうした記述はその後、歴代の正史、『後漢書』西域伝・『魏書』西域伝・『晋書』四夷伝・『北史』西域伝のなかに、すこしずつ変容を重ねながら、継承されていった。

大秦のユートピア的記述のなかに、白鳥のように理想国にかんする伝統的觀念一般の投影をみるだけでなく、二世紀後半に陝西に小さな独立国を立てた五斗米道と河北において大反乱を起こした太平道（黄巾）という、二つの古道教運動とそれとのあいだに、たんなる暗合以上のものをみるのはスタンである。³³⁾ 太平道の開祖張角は大賢良師と自称し、版図を三十六方に組織した。方は將軍にあたる。五斗米道は漢の駅亭にあたる義舎を創設した。駅亭はじっさいには理論的な原則にすぎなかったが、義舎は旅人に無料で食事を供しただけでなく、犯した罪をあらわにするために使われ、小さな過は百歩の道路を修理して贖つたとされており、重要な施設であつた。また太平道では、飲酒制限を犯した者に道路の修理を課した。別べつにはじまった二つの道教運動は、しかし最初から似ており、急速に混り合つていった。

大秦国の記述にあらわれる理想国の道教的な姿は、ほかのいろいろな国についても用いられ、展開されているとして、スタンは『魏

略」(および『魏書』)と『神丹経』下との簡単な対照表をつくっている。⁽³⁴⁾しかしその表は、ユートピアそのものを主題とするこの文章には簡単すぎるし、無論を杜薄とするなど二、三の小さな誤りもある。そこであらためて、『魏略』の大秦国の条と『神丹経』下の諸国の記事のほかに、『太平御覧』その他にみえる『南州異物志』をあわせ、対照させたのが表1である。『魏略』では大秦一国に集中しているユートピアの要素が、『南州異物志』とそれに依拠した『神丹経』下では、諸国に分割・記載されているのがわかる。

魏の魚豢の『魏略』と呉の万震の『南州異物志』はいずれも三世紀の著作であるにちがいないが、どちらが早く成立したかはわからない。記事についても、『魏略』が『南州異物志』に影響をあたえたのか、逆に『魏略』が『南州異物志』を集約したのか、それとも両者に共通する材料があったのか。いずれにしろ、それはここでは重要でない。注目したいのは、『南州異物志』のほうが『魏略』よりやや物語的要素が強く、『神丹経』下ではそれがいっそう誇張され、ときに道教的色彩を加えられているということだ。

『神丹経』下には、『南州異物志』にない、「奉道」「奉大道」という表現が頻出する。いうまでもなく大道は、大いなる教えとともに大きな道路を含意する。だからこそ古道教では、道路を修理することが罪を贖うことを意味していた。「道路を修すると大道を取興するとは、類を以って相占う」⁽³⁵⁾のである。大秦国の幹線道路沿いには、

『魏略』によれば、十里ごとに一亭、三十里ごと一置が設けられていた。『南州異物志』は無論国の大道についてこう記述する。

無論には大道がある。両側には桃・枇杷などもろもろの花をつける果樹が植えられている。白昼その下を行けば、涼しい木陰が熱さをさえぎってくれる。十余里ごとに一亭が設けられ、どの亭にも井戸水がある。

ここには大道(大いなる教え)を実現した国における大道(幹線道路)のユートピア的風景がひろがっている。無論国のこの「有大道」という表現、大道という語の両義性と象徴作用が、あるいは偽葛洪に「奉大道」という表現を喚起し、ひいては『神丹経』下を構想させる、直接のきっかけとなったのかも知れない。偽葛洪の着想が思いがけなく単純なのは、まさに指摘したとおりだ。

偽葛洪は『南州異物志』にあった物語的要素を飛躍させ、道教的要素を塗り重ねて、南方と西域の諸国を全体としてユートピアへと転化させる。それらユートピア諸国の中心にあって、道教的精神の高みを極めているのは、やはり中国人の架空地理学のなかで古くから輝かしい位置を占めてきた、大秦でなければならなかった。『南州異物志』の文の二箇所に入れたコント、CIIAとCII Bによって、偽葛洪は道教国大秦を描き出そうとする。

CIIAは老子化胡伝説を引き合いにだして結ばれている。『史記』老子列伝によれば、老子は周が衰えたのをみて、その地を去った。

表1 ユートピアの要素の集中と分散

魏略・大秦国	南州異物志	太清金液神丹經・卷下
其国無常主、国中有災異、輒更立賢人以為王、而生放其故王、王亦不敢怨。	〔察牢国〕人民勇健、举国人皆称王種。国無常主、国人常選耆老有德者、立為王、三歲一更举。	〔察牢国〕人民勇健、举一国人民自稱王種。国無常主、国人常選耆老有德望者、立為王、三年一更、举国尊之。
其俗人長大平正、似中国人而胡服。自云本中国一別也。	〔杜薄国〕佚 〔林陽国〕男女行仁善。 〔師漢国〕佚 〔斯調国〕欠 〔大秦国〕欠 〔姑奴国〕人民衣被中国。	〔杜薄国〕男女白色、皆著衣服。……男女溫謹、風俗似広州人也。 〔林陽国〕男女白易、多仁和。 〔師漢国〕漢家威儀。 〔斯調国〕……似中国人、言語風俗亦然。 〔大秦国〕風俗如長安人。……又大秦人白易長大、出一丈者。 〔古奴斯調国〕皆多白皙易長大。……人民衣服如中国無異。
其制度、……郵駅亭置如中国。……十里一亭、三十	〔無論国〕有大道、左右種桃枇杷諸花果。白日行其下、陰涼	〔無論国〕有大道、左右種桃榔及諸華果、白日行其下、陰涼

関（後世の伝説では函谷関）まで来たとき、関令の尹喜（いんき）に請われて『老子』上下篇五千余言を著し、いずこかへ立ち去ったという。後世、そこから老子は流沙の西へ赴いたとする伝説が生まれた。劉宋の范曄（はんえつ）（三九八―四四五）の『後漢書』襄楷伝に引くその上奏文に、つぎの言葉がある。

或ひと言えらく、老子 夷狄に入り浮屠（ふと）と為る、と。

関を出て老子はインドへ行き、仏陀となつて仏教を創始し、人びとを教化したという伝説は、すでに後漢代に形成されていたとみてよい。のちには『老子化胡經』と称する偽經まであらわれた。晋の道士王符の作と伝えられるが、仏教に優越しようとする道教徒の創作であつたのは、いうまでもない。そして、老子化胡伝説から老子が教化したのはじつは大

里一置。 以水晶作宮柱及器物。	蔽熱、十余里一亭、皆有井水。	蔽熱、十余里一亭、皆有井水。
大秦多金・銀……明月珠・夜光珠・真白珠・虎珀……流離……水精……。	〔師漢国〕 上有神人及明月珠。 〔斯調国〕 欠 〔罽賓国〕 佚	〔大秦国〕 家居皆以珊瑚為稅櫺、瑠璃為牆壁、水精為階屺。 〔師漢国〕 上有神仙人、及出明月珠。 〔斯調国〕 多出珍奇、金・銀・白珠・瑠璃・水精及馬珂。又有火珠……名曰夜光珠。 〔罽賓国〕 有……琥珀・瑠璃・水精。

（佚は当該国を記述する文が現存しないもの、欠は佚文に対応する記述を欠くもの）

秦であったという新しい伝説までの距離は、ほんの一步である。

C II B

むかし、中国人が扶南に往き、ふたたび船に乗り込んだ。船は海に出て古奴国へ行こうとしたのだが、風向きが変わって行き着けない。そこで船は昼も夜も休む間もなく帆走して六十日経つてようやく岸辺に着いたが、どこかわからない、岸に上がって人をさがして尋ねると、ここは大秦国だという。それは商人がもとと往こうと

するところではない。びっくりして怖くなり、擱まって痛い目に合うのではないかと心配して、扶南王の使者と詐り、大秦王のまえにまかり出た。
王はそれを見てたいへん驚いて言った。
「そなたの海岸はきわめて遠く、もとより人も住んでいよう。おんみはどここの国の人か。なにをしに来られた。」

扶南の使者は答えて言った。

「それがしは北海のほとり、扶南王の使臣にて、王の宮廷に來朝し、うやうやしくひかえております。

それに王国にはすぐれた商品やめずらしい宝物があると聞いており、あわせて玄黄を譲っていただき、それがしの都を飾りたいと願っております。」

大秦王は言った。

「おんみは周国の辺境の民であったか。なんと二十万里の大海をおし渡つて王宮にまいられた。はなはだご苦労であった。さきほどおんみがやって来るのを見て、我国の教化の状態を観察し、風習の長

短所を察知し、人の行為の品性を見分けるのではと、それだけを心配していた。ところがなんと、入手し難い商品を欲しがり、競争の門を開こうとしているのだとは、うかつにも気づかなかった。玄黄をとりよせて感覚を病ましめ、よこしまな盗みに^な長けて労苦をふやそうとはな。どうしてかえって大川に（委ね）て生命を軽んじ、大海に（入っ）て一身を蔑^{ないがしろ}にするのか。周は政治の根本を確立するという段になると、ただ財貨を軽んずることを旨とし、（財貨を求めて）奔走する者は、蔑^{さげす}まれずにはいなかったし、弊^{くさ}まずにはいなかった。わたしが遥かにその教化の状態を見てとるところでは、乱世の兆はすでに六方の内に表われ、悪政はすでに八方の外に知れわたっている。だからこそやって来て（財貨を）ねだっているのだし、もはや与えて帰国させるのがふさわしかろう。」

そこで五色の夜光玄珠・珊瑚・神璧・白和朴英（？）、首にかける神玉・瓊虎^{けいこ}・金剛など、もろもろの神妙珍奇な物を使者に与え、使いの者を遣してただちに出發させ、こう諭させた。

「我国はもともと道徳を貴んでこれらの物をばかにし、仁義を重んじて財貨に貪る盗人を嫌い、正しく賢い心を大切にして度を越した欲望を退け、神仙を尊んで精神の調和を求め、私心のない清らかさを敬って喜怒哀楽（のバランス）を保ち、こうした類の物や（虎豹を食う）斑^{まだら}の駁^{さく}や玄黄などは、飛雁が虫や蝶を視るように、横目で見て過ぎるのだ。そなたが今後ふたびこれらの商品をたずさえて

往復するなら、わが真心の国に競争をもたらし、人びとの感覚をそこなわせ、その統治によこしまな争いを生じさせ、先人の遺風はそこから壊れることになるだろう。海関の役人に命じてそなたを入港できないようにすべきである。この言葉を心の誓いとして慎むがよい。」

使者は無言で退去した。

また四年経ってやってくると、扶南の使者はあらかじめ、船中にもっていた綵絹^{さいきぬ}千匹を、大王に献上した。

王は笑って言った。

「夷狄の綵絹にすぎぬ。なんとひどい粗末な物よ。物が粗末であるとき人びとは弊^{くさ}んでいるというが、まことにその通りだ。我国の使うものではない。」

ただちに送り返して受け取らず、その機会に使者にみごとな玉や絹織物を見せた。八色に彩る文織^{あやおり}、流水飛雲の蒼い錦織、玉の糸でできた白絹、金を嵌^はめた孔の文様の青い薄絹。白は雪のよう、赤は朝焼けのよう、青は翠^{かわせみ}の羽よりも青く、黒は飛ぶ鳥にも似て、きらきらと光り輝き、五色が一面に入り乱れ、布の幅は広さ四尺、粗悪なものなどない。ところがふと使者をみると、ありふれたみずばらしい体つきに北方の地の白絹と、まことに滑稽である。

（使者は）自分で言った。

「大秦国にはなんでもあって、すべて中国の物より立派であり、比

較する理由などいつになってもない。竈かまどや炊飯にいたるまでみなそうだ。薰陸香の木を焼いて、芳香はあたりにたちこめ、国には穢れた臭いものなどなく、実に徳のさかんな国ということだ。」

使者はやがて帰国して、事の顛末をこのように詳しく語った。それ以後、あえて大秦まで往復しようとする者はなく、行旅の商人たちはみなこのように（話を）伝え、とうとう（往来は）ながく途絶えたのである。

洪わかしが考えるに、ただもし仁義を實踐し、志は堅く性格は淡泊、虚無を追求し教えを理解し、内心は無欲な人なら、その人を推挙してかの大秦国に遊学させれば、きっと真理を会得しようか。もしそうではなくて、交易を目的に訪ねるとすれば、まことに筋が通らない。

また大秦の人は色が白く背が高く、一丈あまりになる者があり、身ごなしは厳しくとのい、動くときは礼儀と節度があり、止まるときは心は静かに澄みきっており、口について出る言葉は現世を超越し、行い正しい人びととさかんに交遊する。ところがひょいと行旅の商人の男はとみれば、言葉にちがいはないのに、天下をきちんと治めて進む方向を見定めるすべを知らず、ただやたらに金や物を欲しがるだけである。大秦王はいよいよそれをさげすみ、思いをすべて言葉にして周国の人をいさめたが、すべてはまさにその通りなのだ。

むかし、老子は周が衰えたために、すすんで大秦に行つてそこを教化した。そこで扶南の使者を周人とよんだのである。周代には四方の異民族はあまねく服属し、扶南もともに客としてもてなされた。そこで越裳の人が白雉を抱きかかえてきたし、象牙を周に献上した。いま四方の異民族はみな中国を漢人と呼び、晋人と呼んでいるが、大秦は中国を遠く離れ、たがいに往き来することはない。ただもし老子はかつて周の記録係の役人であつて、やがて大秦に行つたとしたら、きっと周国と称したのだ。そこで周人とよんだのだが、周国はすでに遙かなる彼方に過ぎ去っているのである。

扶南使者のことばに「玄黄を請乞して以つて鄙邑ひやうを光かがやかさんと欲す」、大秦国王のことばに「玄黄招きて以つて耳目を病ましむ」という、その玄黄とはなんだろうか。玄黄という語は、『易経』坤卦・文言伝の「夫れ玄黄は天地の雜なり。天は玄にして地は黄なり」に由来し、もともと天地を意味する。鍊金術書からすぐ思いつくのは、靈藥を調合する過程で最初につくられる物質である。『太清金液神丹経』巻上によれば、礬石・戎鹽・瀘鹹・礬石・牡蠣・赤石脂・滑石の七物でつくった泥状の六一泥を、土釜の表裏に厚さ三分に塗つてよく乾かしたのち、

復た水銀九斤・鉛一斤を取り、土釜中に置き、其の火を猛くして旦よ従り日下晡に至れば、水銀・鉛精しん俱に出ずること黄金の如

し。名づけて玄黄と曰う。一名飛輕、一名飛流。

また『黄帝九鼎神丹經訣』卷一には、「黄帝曰く、神丹を作らんと欲せば、皆な先に玄黄を作る」として、

玄黄法。水銀十斤・鉛二十斤を取り、鉄器中に納れ、其の下火を猛くすれば、鉛は水銀と与に其の精華を吐く。華は紫色、或は黄金色の如し。鉄匙を以てて接取し、名づけて玄黄と曰う。

一名黄精、一名黄芽、一名黄輕。

という。水銀と鉛のアマルガムである。靈藥の原基ともいふべきこの物質には、しかし「鄙邑を光かす」はたつきはない。

『政和本草』卷三に引く唐の陳藏器の『本草拾遺』は、淄川・北海（山東）の山谷の土石中に産するという玄黄石を採録している。土地の人はそれを赤石と呼んで朱（赤色の塗料）に用いており、赤土・代赭だいしやの類であろうという。李時珍はそれを代赭と同じ物とみる（『本草綱目』卷十）。代赭とはもともと代郡（山西省北東部）でとれる赤土を指す。赤土・代赭は赤鉄鉱であり、顔料や薬になる。

『傷寒論』には旋覆代赭石湯がある。また、『政和本草』卷五・代赭に引く陶弘景注には、「此れ俗用においては乃ち疎にして、仙方の要と為す」、『丹房鏡源』には、「代赭は金色を出だす」、『本草衍義』には、「代赭は方土 爐中に用いること多し」とみえる。さらに、いま官庁が椽や柱を飾るのに用いているのが赤土だ、と『本草衍義』はいう。「鄙邑を光かす」玄黄は、錬金術者が金色を出すために反

応爐に入れ、あるいは塗料として建物を裝飾する、こうした類の鉱物と考えていいだろう。ただ扶南の使者が求めた玄黄を赤鉄鉱とすれば、ありふれた廉価な鉱物であり、なにも大秦から「奇貨・珍宝」ともに入手する必要はあるまい。わたしはこう考えておきたい。塗料になる玄黄石の話聞いた偽葛洪は、それを「大丹の基本」（『諸家神品丹法』卷二）である玄黄と混同した。こうしてかれの脳裏には、紫色あるいは黄金色に輝く高価な塗料としての玄黄のイメージがいつしか生じていた、それは人びとを感覚的欲望へ走らせずにはおかぬほど美しいのだ、と。

C II Bにおいて偽葛洪が描き出したユートピアは、欲望と競争を断ち切った豊かな社会である。決して相容れない二つの状況が、ほとんど矛盾と意識されることなく組み合わされ、投げ出されている。神に捧げる穀物や衣服をみずから耕織する天王と王妃の行為に象徴的に表現されていた農業社会の理念の残照は、C II Aとちがって、表面から姿を消した。C II Bの舞台は、宝石や香木をはじめ豊饒な自然の産物に恵まれ、しかも最高の技術をもつ工匠たちが中国製とは比較を絶する精巧・華美な工業製品をつくりだしている、資源国にして手工業国である。人びとは決して粗末な物は使用しない。物が粗末なのは人びとが弊くそんでいるしなのだ。ところが一方では、この国は「道德を貴尚して此の物を慢賤し、仁義を重んじて貪賊を惡にくみ」、「得難きの貨を貪り、争競の門を開く」者を厳しく拒けよう

とする。そして「性命を洪川に軽んじ、一身を大海に蔑に^{ないがしろ}して」「此の貨物を以て来往する」外国貿易を、結局「民の耳目を傷^{やぶ}り、姦争を其の治に生ぜしむ」るものとして禁止する。

偽葛洪によれば、「昔 老君は周衰えたるを以て、将^すんで入りて大秦を化^{くわ}したという。「大道の出ずる所」である大秦の形成には、老子の教化があずかつて力があつた、偽葛洪はそう想定してこのコントを書いている。たしかに老子は、「得難きの貨は、人の行いをして妨げしむ」（『老子』第十二章）、「得難きの貨を貴ばざれば、民をして盗^た為らざらしむ。欲す可きを見ざれば、心をして乱れざらしむ」（第三章）といい、「舟輿有りと雖も、之に乗る所無く、……隣国相望み、鶏犬の声相聞こえて、民は老死に至るまで、相往来^{わいらい}」しない「小国寡民」（第八十章）を理想とした。しかし、それはあくまで手工業生産の高度の技術を否定することによってはじめて実現されるはずのものであつた。「巧を絶ち利を棄てよ、盜賊有ること無けん」（第十九章）、「民は利器多くして、国家は滋^{ます}ます昏^{くら}し。人に技巧多くして、奇物滋ます起^{おこ}る」（第五十七章）。そして人びとには「其の食を甘^{うま}しとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を楽しましむ」（第八十章）、粗末な衣食住や単純な習慣に満足することを求めるのである。⁽³⁶⁾ 偽葛洪は老子の教説を半分だけ継承し、半分は拒絶した。そしてその空隙をまったく逆の理想で満たした。欲望や競争のない社会と豊かな社会、観念の世界においてであれ

二つの社会が矛盾なく共存しうるとすれば、それは彼岸を描いてはありえないだろう。偽葛洪が大秦に託して描いたのは退外の、超越的世界のユートピアであつた。「已に百代を経」た周国の政治と道德が超時間的な理想であつたように、周代の記憶をとどめ老子の教えを実現した大秦は、ある意味で超時間的な存在であり、また交通が永絶しているという意味では、超空間的な存在でもあつたといつてよい。

8 第三のコント——不思議な草木

第三のコントを生んだ罽賓国は北インドのカシミールの地にあつた。前漢の武帝のときはじめて中国と交通し、その存在が知られた。まず『漢書』卷九六上・西域伝上の記載を抜萃しておこう。

罽賓国、……西北は大月氏と……接す。罽賓は地平、温和にして、目宿・雜草奇木・檀^{まのみ}・櫟^{えいれい}・梓・竹・漆有り。五穀・蒲陶^{ぶとう}諸果を種え、園田を糞治す。地は下溼にして、稻を生じ、冬は生菜を食う。其の民は巧みにして、彫文刻鏤し、宮室、織罽・刺文繡を治し、好んで食を治す。……沐猴・孔爵・珠璣・珊瑚・虎魄・壁流離を出す。它的畜は諸国と同じ。

『御覽』その他に罽賓国の『南州異物志』の佚文は残されておらず、『神丹經』下の記述はほぼ『漢書』の右の抜萃を踏襲する。異同は誤謬ないし誤写から生じたのであろう、かえって読みづらくなつて

いる。

罽賓国は月支の西北（東南の誤り）にあり、大国である。土地は平坦で広く、人びとはおだやかである。苜蓿草木・雜奇木・檀・梓・竹・漆・鬱金香があり、五穀や蒲萄などの果樹を植え、国の園田を経営し、低湿地が多く、そこにはかならず稲を種えている。技術に長じた人が多く、文様を彫刻し、毛織物に刺繍し、冷たい飲食物を好む。獼猴・孔雀・珠璣・琥珀・瑠璃・水精がある。その家畜は中国と同じである。

最後の「諸国と同じ」を「中国と同じ」に改めたのは偽葛洪かも知れないが、『南州異物志』の文も全体としてはほぼ同じであったと考えておいていいだろう。

つづけるコントCIIIは苜蓿草と雜奇木を題材に展開する。

C III

苜蓿草木は不思議な世にも珍しい物であり、芋のような形をしているという。人が病気で目が見えなくなり、両目がへこんでしまったとき、その根の汁を絞って飲み、その茎や葉を火にかけて煮て煎じ薬とし、へこんで爛れたところにつけると、七、八日はかりで、そこにあらためて眼球が生じてすっかりなおるということだ。

古人がこんな話を伝えている。あるひとがにわかに眼の病いにかかったとき、主君の国王に召し出された。行かねばならないのだが、

命に従うのもままならぬ（到命不展？）。服藥神師がその妻の片方の目を借りて使わせるといので、師の言葉にしたがうことにした。師は刀で妻の目をくりぬき、借りて行って一宿経って、やっと戻ってきてそれを返した。師ははじめ目を取りだすだになると、草根を臼でついて汁を飲ませ、あわせて目を潰れておき、そこでくりぬくと、くりぬいても痛まない。自分のまぶたにつけるのにも、この汁をまぜて用いると、たちまち体のその部分のはたらきを助けて、万物を鏡のように映しだす。もとに戻すときも、人がやはりこの汁を用いると、すぐにまた元通りになる。これは天然の靈草であり、不可思議なはたらきはとも口では言えない。そこで苜蓿草と名がついたのは、目を借りて一宿経ったからである。

わたしは子供のとき、かつてこの話を聞いて、嘘っぱちだと信じなかった。結局、南の国境地帯まできて、教養ある人たちに尋ねると、有識者がいうには、「苜蓿草は罽賓国の別のある山の上に生えている。百余年に一度生え、生えているのは中国の菖蒲華のように手に入れるのが難しい。教えに精進しているのでなければ見ることはできない。この山は今ほ苜蓿山と名づけられている。山にはたくさんのお泉があり、水の色は青い。罽賓国のひとは、老人も若者も目の病いにかかれば、すぐに興にかつがせてこの山にきて、泉で洗うと、みんななおってしまう」と。水でさえ疾病の目をなおすことができる。まして百年に一度生える神草が、へこんで爛れたところ

をなおさないわけがあらうか。古来の伝承にしても、その山川で効用がためされたとなると、ありありと目に浮かぶはずだ。

石彦章という外地人^{よそもの}で、長く扶南に住んでおり、しばしば外国に往来したのがいうには、「かつて罽賓まで行って苜蓿山を見たが、高くて大きい山というのではない。山には雑奇木のほかはなにも生えておらず、その形は柘^{くわ}に似ている。その木を伐って、十余年経ったら、裂いてそれで机と橙^{こしかけ}（几橙^{こしかけ}？）、車体、建物、そのほかのこまごました物を作り、あとでばらばらにして土の中に埋めておくと、みんないろんな物がすぐに生えてくる、楊柳の苗木を植えたさまに似て、雑奇木と呼ばれている」と。還ってきて苜蓿山麓の土の中に埋めたが、ほかの土地では生えなかったということだ。

洪^{わかし}の考えでは、この山はきつと長生の丘なのだ。どうしてそう言うかといえば、その草が生えたのを利用すれば、爛れた目も逆に見えて光を出すようになり、木を伐れば、百年後に植えてもなお、山石の靈妙なはたらきによって、人の精気のはたらきを引き継ぎ、泉の流れにはぐくまれて、朽ちた木もふたたび生えてくる。そのことを心得て身を処し、身体を養い、山の氣に随って、尽きることなき命を享受できるのに、長い歴史をもつかの国は、どうしてまだそれを悟らないのだろうか。

苜蓿草とはなにか。本草には、『名医別録』によってはじめて記

載されたいわゆる別録品のなかに、苜蓿がある。陶引景の注に、長安中に乃ち苜蓿園有り。北人は甚だ此れを重んず。江南の人は甚しくは之を食わず、味無きを以っての故なり。

北宋の寇宗奭の『本草衍義』に、

唐の李白の詩に云う、「天馬は常に嚼む苜蓿花」と。是れは此の陝西に甚だ多く、牛馬を飼う。嫩^{わやば}の時、人も兼ねて之を食う。微に甘・淡なり。多くは食う可からず。……宿根有り、刈り訖^おれば又た生ず。

要するに飼料である。マメ科ウマゴヤシ属 *Medicago* L. の草を中国では苜蓿と呼んだ。M. denticulata, wild. 苜蓿、ウマゴヤシ。M. lupulina L. 天藍苜蓿、コメツブウマゴヤシ。M. minima Lamk. 小苜蓿、コウマゴヤシ。M. sativa L. 紫苜蓿、ムラサキウマゴヤシ⁽³⁷⁾。薬としては、脾・胃・大小腸などに効き、膀胱結石をなおすといわれる。このなかで古くからペルシアをはじめ西方でひろく栽培されたのは、紫苜蓿である。

プリニウスの『博物志』XVIII⁽³⁸⁾・43はこう書いている。

ムラサキウマゴヤシは、ダリウスに率いられたペルシア人の侵入の際、メディアから輸入されたもので、ギリシアにとっても外来のものだ。しかしこんな大きな賜物は穀物のうちでももっとも大事なもののひとつとして述べる価値がある。それはたった一度播けば三〇年以上も生き続けるからだ。

そして栽培法を詳しく記述する。中国では後魏の賈思勰が『齊民要術』巻四の一節を「種苜蓿」に割いた。⁽³⁹⁾

苜蓿は前漢の武帝のとき、漢の使節が大宛（フェルガナ）から持ち帰ったと記録されている。『史記』大宛列伝によれば、

漢使 其の実を取り来たる。是に於いて、天子始めて苜蓿・蒲陶を肥饒の地に種う。天馬多く、外国使来たること衆きに及びて、則ち離宮・別觀の旁に、盡く蒲萄・苜蓿を種えて、望を極む。

この飼料としての苜蓿はあきらかに、偽葛洪が描いた目薬としての苜蓿ではない。

実をいえば、陶弘景は本草の苜蓿の注に「つぎのように書き加えていた、

外国に復た別に苜蓿草有りて以て目を療するは、此の類に非ず。

と。苜蓿と呼ばれる目に効く薬草があるという話が、たしかに中国に流布していたのだ。その苜蓿とはなにか。ひとつの手掛りが『香葉抄』にある。

苜蓿香 梵云薩必栗迦
亦云薩止薩珍

明の李時珍は『本草綱目』巻二七・苜蓿の釈名に「金光明經は之を塞鼻力迦と謂う」と記しているが、これは飼料の苜蓿草と『香葉抄』にいう、苜蓿香を混同したのである。

矢野道雄教授の示教によれば、薩必栗迦・薩止薩珍・塞鼻力迦からみて、*sa-*ではじまるサンスクリットの単語の写音と思われ、これらにいちばん近い音をもつ植物名は *saptalika* (*saptala*, *satala*, *satala* も同義) であろうという。ただ植物の同定については論争があり、つぎの四種が挙げられている。⁽⁴⁰⁾

- (1) *Euphorbia tirucalli* L.
- (2) *Acacia concinna* DC.
- (3) *Euphorbia dracunculoides* Lam.
- (4) *Euphorbia pilosa* L.

(2) はマメ科アカシア属 *Acacia Mill.* の低木。インド、ビルマ、中国南部、ジャワに分布し、豆果は洗剤に、若芽は食用になる。⁽⁴¹⁾ ほかの三種はトウダイグサ科トウダイグサ属 *Euphorbia* L. である。この属の植物は、茎や葉を傷つけると白い乳汁が出るが、そのなかにステロイド系の物質がふくまれている。有毒植物が多く、古くから薬として用いられており、属名は前一世紀のローマの医師 *Euphorbus* に由来するといふ。⁽⁴²⁾ 最近では石油植物として注目を集めている。

中国では沢漆（トウダイグサ）・大戟（タカトウダイ）・続随子（ホルトソウ）・草薢茹（ノウルシ）などがこの仲間に入る。(1) はアオサンゴ、高さ七メートルにも達する熱帯産の常緑多肉植物。有毒で発癌性があるといふ。⁽⁴³⁾ 苜蓿香としていちばん有望なのは、おそらく(3) だろう。黄色い花をつけ、たっぷり乳汁をふくみ、種子からとれ

る油は皮膚病の薬や燈油として用いられる。⁽⁴⁴⁾ (4)は根が下剤や瘻の痛み止めに使われているという。⁽⁴⁵⁾

トウダイグサ属の薬草は、利尿剤・胃腸薬・皮膚病薬・止血剤・鎮痛剤・解毒剤・殺虫剤などに使われているが、⁽⁴⁶⁾眼科の薬として用いられている例はないようにみえる。目の病いに効くという伝説はあるいは漢語の名称の首蓆（目蓆とも書く）から起こったのではあるまいか。すくなくとも偽葛洪は首蓆を使った手術を目蓆という名称から思いついたのは明らかだ。「首蓆草と名づけしは、目を借りて経宿せるに由る」と。つけ加えておくなら、陶弘景が『太清金液神丹経』巻下を読んで本草に注した可能性も、絶無ではない。

首蓆の目薬伝説と目蓆の名称に想を得て、偽葛洪はこの物語をつくりだした。制作物の部品を埋めておくところから生えてくる雑奇木の話にいたっては、偽葛洪先生の走りだした想像力のささやかな楽しみであった。いずれにしろ、すべては再生の話である。そこにみられるような完璧な再生は、そのまま長生を意味する。衰えゆく生命、病みゆく身体を再生させる自然、偽葛洪ふうにいえば長生の山を、またそこにある仙境を、道教徒はくりかえし描いてきた。たとえば『十洲記』がそうであった。長生の可能性を確信する道教徒たちにとって、理想郷の一表現としての長生の山は、思念の世界に実在しなければならなかった。偽葛洪はそれを麗賓国首蓆山として具象化してみせたのであった。

9 ユートピアの構造

歴史家たちが『南州異物志』に注目してきたのは、その史料的价值の高さのゆえである。内田吟風は書いている、その「内容は三世紀東南アジア文化史上の重要事項を多く含んでいる」⁽⁴⁷⁾のみならず、そこに「見える東南アジア諸国・島嶼の人口、予樟・斑布・古貝（木綿）・橘・明珠・海舶等の記事遺文を参照玩味しなければ、到底例えば魏志倭人伝の如き三国史料を正しく解説することもできなければ、また当時の海上交通の盛行、漢魏人の海外知識の正確性を正しく理解することもでき」⁽⁴⁸⁾ない、と。その意味では、『太清金液神丹経』巻下が書中に採録した『南州異物志』は物産志を欠いており、その価値を半減する。しかし、諸国志にかぎっていえば、ほかの書には記載のない佚文をふくみ、記述はしばしばほかの書にみえる佚文よりも詳細であり、しかも全体として一貫した記述をあたえている。のみならず、偽葛洪は序章において、『南州異物志』の諸国志に書かれていたであろう国名を列挙して目次に代え、おなじく終章において、物産志に載せられていたであろう香類の産地を記録にとどめた。『太清金液神丹経』巻下の史料的价值はこうした点に求められよう。要するに、それはすべて『南州異物志』の文章ないし記載内容をいかに正確に、いかに多く伝えたか、という一点に帰着する。いいかえれば、歴史家たちが期待するその史料的价值はひとえ

に『南州異物志』にかかっているのである。『南州異物志』をはじめとする外国志、正史外国伝その他の記載を丹念に集め、『太清金液神丹経』巻下の外国地理の記載と比較した饒宗頤は、後者の古地理研究上の価値として五つの点を挙げているが、それも結局わたしが述べた範囲を出るものではない。

『太清金液神丹経』巻下の史料的价值が『南州異物志』に依存しているということは、前者のなかに史料を求める人びとに、万震の文章と偽葛洪の加筆の判別という、むずかしい課題を押しつけることになる。『南州異物志』の史料的价值を重視したマスベロは、『太清金液神丹経』巻下の大秦国の記事を検討してこう述べている、「ともかくにも事実と地中海諸国について三世紀に中国に広まっていた話との寄せ集め」である万震の著作を、著者が忠実に複写しようとはせず、「想像力の所産にすぎぬ偽葛洪の小さなコント」に置き換えてしまったことは、「われわれにとって不幸である」と。偽葛洪の著作に「事実」を捜す歴史家は、たれもがマスベロの歎きを共有しなければならぬだろう。

だが、その「想像力の所産」のなかに、スタンのように「理想国に関する中国人のユートピアの投影」⁽²¹⁾をみることもできる。いやそれどころか、『太清金液神丹経』巻下はもともと中国ユートピア思想史のなかにこそ位置づけらるべき作品なのである。この著作をとりあげる歴史家たちが、これは三巻から成る鍊金術書の最終巻であ

るという明白な事実から出発しようとはせず、『南州異物志』や『異時外国伝』などと同類の一般的な外国志が偶然そこにまぎれこんでいるといわんばかりに取り扱っていることに、わたしはむしろ驚きを覚える。

『太清金液神丹経』巻下は、かなり緻密に計算され、周到に構成された作品である。真人陰長生撰とされる巻中では、東晋の初年に葛洪の師の南海大守鮑靚が仙人の陰に出会い、東晋の未来にたいする予言と身体のだりに刀を棺中に残して昇仙する刀尸解の法とを授かり、その予言をしたためて元帝に上表し、その死後、墓には刀が残されていた話で終っている。葛洪は「太平存亡の期」を知りたくて鮑靚の書をさがし求めたが、動乱の間に焼失したのか、ついに入手できなかったという。その後を受けて巻下では、葛洪は「薬を求めて以って性命を養う」といともない戦乱の中国を避け、靈薬の原料に富む南方へ旅立とうとする。

偽葛洪が目指す南方諸国は図1のような構造をもつ。一方には象林にはじまる丹砂を産する諸国、他方には月支に終わる大道を奉ずる諸国があり、両者の特性を兼ね備えた林楊がその結節点に位置している。大道系列の極点を形づくるのは、二つのコントの国、大秦と罽賓である。大秦が大道を奉ずる国の極相をしめしているとすれば、罽賓は長生を可能にする風土的自然のひとつの相をあらわしている。長生の国としては、生丹系列に無倫があった。明示的には書

かれていないが、炎洲の隠章も罽賓と無倫を結ぶ長生の系列に位置づけることができよう。ひとは丹葉の服用と大道の履行という二つの宗教的な実践によって人為的に長生に到達できるという。その両者を媒介し、長生に根拠をあたえたとみなされたのが、自然の長生

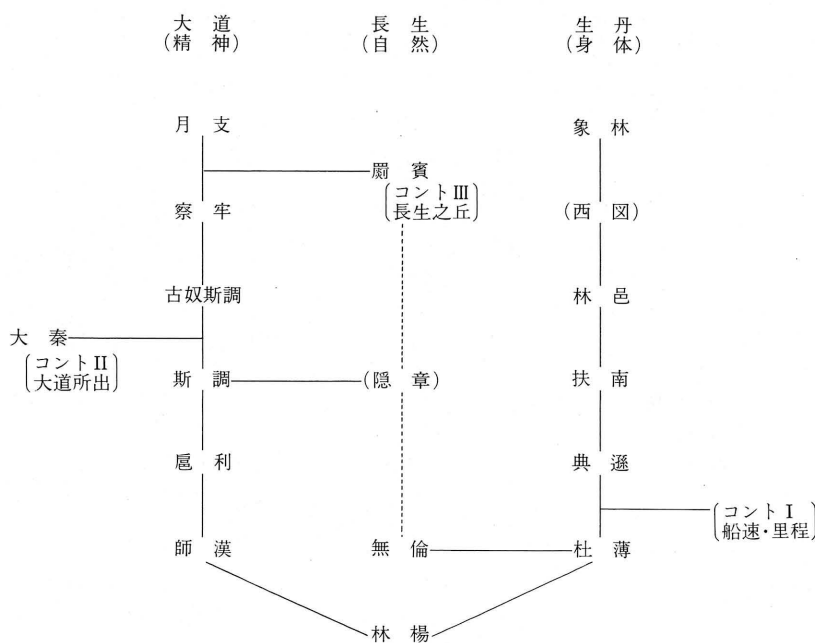


図1 諸国志の構造 (1)

である。長生系列は、だから構造的には生丹・大道の両系列の中間にあることを、論理的に要請される。

こうしてそこにみごとなシンメトリ構造が浮かび上がってくる。長生系列では、発明された国隠章を中点として無倫と罽賓が対称を成し、林楊と長生の諸国を結ぶ中軸線にたいして生丹と大道の諸国が左右に対称的な系列を構成する。この構造は偽葛洪の加筆と創作によって意図的につくりだされた。とうぜん、加筆されなかった国はこの構造の網から漏れる。

偽葛洪にははじめから、広範に情報を集めて正確かつ包括的な外国志を書くつもりなど、少しもなかった。「曾て人の南方の異同を撰し、外域の奇生を記せしを見」たというが、『太清金液神丹経』巻下を書くのに用いた素材は、ほとんど『南州異物志』にかぎられる。あとは不足をわずかに『呉時外国伝』で補ったにすぎない。偽葛洪は『南州異物志』に、ユートピア的世界を構成するための格好の舞台装置と小道具をみいだした。そしてそこに、長生の諸国を軸に生丹の諸国と大道の諸国を、いいかえれば、自然の長生を中心にして人為的な長生にいたる物質と精神の二つの道を、左右相称に配した、錬金術的な世界像を演出してみせたのである。この舞台の観客は、四本マストの大型帆船に乗って大洋を、長生の国にも立ち寄りながら、生丹の国から大道の国へと航海することになる。

ことわっておくが、わたしは構造を諸国の記載の順序によって分

析しており、それぞれの国の条に書かれている方位や里数や到達に要する日数などは無視している。偽葛洪が決定的に重視していたのも順序であったと考えるからである。『太平御覧』巻七九〇に注目しよう。そこには無論・句稚・歌宮・加陳・師漢・扈利・姑奴・察牢の八国がつづけてその順序に並んでおり、文章はすべて『南州異物志』からの引用である。地理的記述のうち方位をとりあげると、典遊（遜の誤り）からの距離が書かれている句稚を起点に、歌宮は句稚の南、加陳は歌宮の西南、師漢は句稚の西、扈利は奴調（姑奴斯調）の西南とみえ、姑奴には歌宮からの距離が記されている。無論（倫）の佚文には地理的記載が欠けているが、『太清金液神丹經』巻下によれば、扶南の南に句稚が、西に無倫がある。ただ最後の察牢は「安息の中間に在る大国なり、天竺を去ること五千里⁽⁵²⁾」とされ、句稚以下の諸国と直接には関係づけられていない。このような記載のしかたからみて、すくなくとも無論から姑奴にいたる七国は、『南州異物志』においてもそのままの順序でつづけて記載されているにちがいない。同一書の連続する数条をそっくりそのまま引用する例は、『御覧』に数多くある。

それについて『太清金液神丹經』巻下には、無倫・句稚・歌宮（林楊）加陳・師漢・扈利（斯調・隱章・大秦）古奴斯調・察牢の順に配置されている。偽葛洪が、歌宮・加陳間に林楊を、扈利・古奴斯調間に斯調・隱章・大秦を、それぞれ挿入したのは明らかであ

ろう。そのさい、林楊がどのように位置づけられ、また斯調・隱章・大秦の三国がどのように関係づけられたかは、すでに述べた。

この三国のあとにくる古奴斯調やとりわけ察牢はもともと、まえに表にしめしておいたように、『魏略』では大秦にあたえられていたユートピアの要素の一部を、すでに『南州異物志』において配分されていた国であった。位置づけに不自然さを感じさせないように努力しているのだ。こうしたすべてが、偽葛洪が配列の順序を決定的に重視していた証しである。ちなみに『太平御覧』は、斯調・林楊を並べて巻七八七に、大秦と天竺を巻七九二に、罽賓と安息・大月氏を巻七九三に収めている。

偽葛洪の諸国志は、舞台のうえで幕から幕へ、景から景へと展開されてゆくドラマに譬えることができる。生丹系列と大道系列という二つの幕のなかで、諸国はそれぞれひとつの景を成す。三つのコントは典遜と大秦と罽賓の景にはさみこまれた劇中劇である。観客が幕と景を追って演劇を見るように、読者は配列された順序にしたがって諸国志のドラマを読む。このドラマにあつては、配列の順序が筋を構成し、筋が諸国の性格を決めてゆくのである。

それでは、図1において生丹系列と大道系列を繋ぐ林楊の、ドラマにおける位置づけはどうか。理念的な構造のうえでは、林楊は杜薄と師漢に直結している。しかし諸国志の記述においては、歌宮と加陳のあいだに位置している。歌宮は食人の習慣をもつ裸形の半人

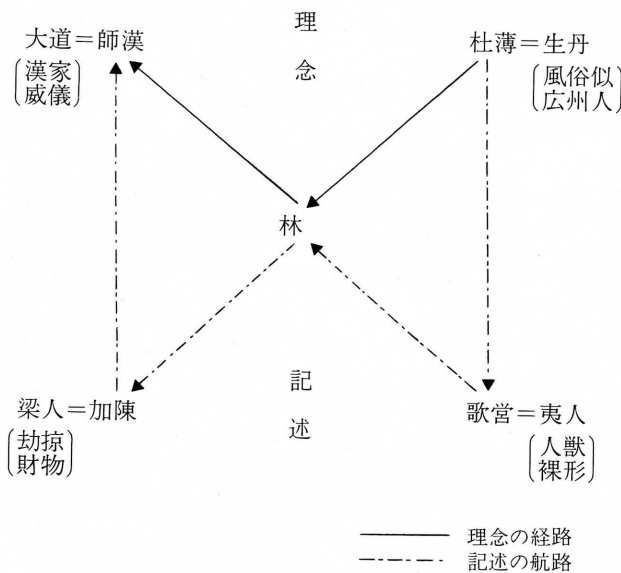


図2 諸国志の構造 (2)

半獸、夷人の棲息する国、加陳は旅人を掠す諸国の強盜、梁人の跋扈する国である。そして無道の国加陳は大道を奉ずる師漢と、食人種の住む歌宮は長生の薬を産する杜薄と、それぞれ対極に立つ (図2)。すでに述べたように、歌宮の裸形人の食人にかんする記事は『南州異物志』ではなく、康泰の『呉時外国伝』から補ったものだった。加陳の梁人の記事は、『南州異物志』はもちろん康泰の書にふくめて、ほかの書にはみえず、偽葛洪の創作にちがいない。歌宮と加陳のあいだに林楊を割り込ませ、そのそれぞれに加筆すること

によって、偽葛洪は林楊を囲む図2の構造を意図的に作りだしたのである。生丹国と大道国という二つの顔をもちながら、食人種と強盜群によって生丹・大道の理念的な二系列との直接的な繋がりを断たれている、またそれによって二つの顔に引き裂かれている国、それがこのドラマのなかで林楊にあてがわれた位置であり役柄であった。

ひるがえって考えれば、林楊の置かれた場所こそ、道教徒であり錬金術者であった『太清金液神丹経』巻下の著者の立場を象徴するものではなかったか。南北朝時代 (四二〇—五八九) の中国は、政変と内乱と王朝の交代のうちづく乱世であった。ときには武帝 (五〇二—五四九) 治下の梁代のような小康も訪れたが、永続する保証はどこにもなかった。動乱ともなれば、文字どおり食人種と強盜群の横行する巷と化し、錬金術の実践はおろか、生命さえ危険にさらされかねなかった。林楊に象徴されていたのは、だが外的現実だけではない。

偽葛洪が大秦に託したのが、欲望と競争を断ち切った豊かさという、引き裂かれた幻想的なユートピアだったのは、示唆的である。錬金術もまた、欲望と競争を断ち切った豊かさを要請した。霊薬の原料はとりわけ乱世において稀少であり高価であり、それに反して錬金術者はたいがい貧乏だった。葛洪の『抱朴子』内篇から切々とその欺きが伝わってくる。「此の道を知る者は多く貧しきに、薬或

は至賤なるも遠方に生じ、乱世の得る所に非ず」(黄白)、「道士は率^{おほ}皆貧し。故に諺に云う、肥えたる仙人、富める道士有ること無し、と」(同)。葛洪自身にしても、『太清丹經』三卷・『九鼎丹經』一卷・『金液丹經』一卷を師の鄭君に授けられてからすでに二十余年になるが、「資に担石無く、以つて之を為ること無く、但だ長歎有るのみ」(金丹)。担石は肩にかつげるくらいいのわずかな量という。「然も其の大薬物は皆な錢を用うれば、直は卒に辨^{あたい}ず可からず」、そこで葛洪は勧める、「当に復た耕牧・商販に由りて、以つて資を索^{もと}め、年を累ね勤を積みて、然る後に合す可し」(地真)、と。だが、まともな生業にいそしみ、「物に無欲」(祛惑)であつてしかも金を貯めるといふ難事にいどむよりも、もっと手っ取り早いのは「富貴なる者」(黄白)に近づくことだ。「雑散の道士輩」が「貴人の門に走る」(祛惑)のは避けられなかった。事実、鍊金術者たちはしばしば皇帝や王侯・貴族・高級官僚にその技術を売りこみ後援を求めたのである。

しかも一方では、靈薬の調査は人跡まれな深山幽谷のいわゆる隠障の地、世俗的なものを一切遮断した聖域においておこなわなければならない。「丹を合^あわすには、当に名山の中、無人の地に於いてし、伴を結ぶこと三人を過ぎざるべし」(金丹)。「合作の日に及びては、当に復た齋潔清淨にして、人事を断絶すべし」(地真)。そのため^すにかりに「已に自ら金銀多」かつたとしても、「買薬の価を

計りて、以つて得る所の物を成せば、尤も大なる利有りとも、更に当に齋戒辛苦すべきが故に、克^よく為すもの莫きなり」(黄白)。要するに一言でいえば、「此の金丹・九丹を合^あわすには、既に当に錢を用うべく、又た宜しく名山に入りて、人事を絶つべし。故に能く之を為す者少し」(金丹)。鍊金術が欲望と競争を断ち切った豊かさのうえに成り立つ、引き裂かれた幻想的な技術であり、宗教的実践であつたことを、『抱朴子』の数々のことは証している。

「男女裸形にして、衣服無く」、しかも「好んで人を啖^くう」夷人は、貧困と短命の象徴であり、「常に行人を伺い、財物を劫掠す」る梁人は、欲望と競争の象徴であつた。生丹から大道へと二つの理念的な系列を航海しようとする「行人」の前後に、鍊金術の目的と存立基盤を無にしかねない二つの現実がはだかつている。それが鍊金術者としての偽葛洪の自覚であり、その自覚を林楊を囲む構造に形象化したのであつた。

偽葛洪は林楊の位置に身を置いた。そして生丹国と大道国を左右に配する、若き日からの夢であつた遐外、理想的な道教国を、現出させた。それはひとりの道教徒が描き出した幻想のユートピアであり、その幻想性は鍊金術そのものの幻想性を表現していた。鍊金術が幻想的な技術であつたことは、それが非現実的であつたことをいささかも意味しない。時代は下るが、九世紀の前半までに鍊金術者が発明した、しかし決して作つてはならぬとみずから禁じた、

「身を損^{そな}い、命を喪^{うしな}い、風を傷^{やぶ}り、教を敗^くる」⁽³³⁾ 悪しき技術があった。硫黄と硝石を主成分とする爆発薬である。⁽⁵⁴⁾ それに木炭末を加えれば、火薬になる。九世紀末か十世紀初めまでに、火薬の製法は軍事技術者の掌中に握られていた。十三世紀後半までに、かれらが硝石の比率をさらに高めて黒色火薬を完成させたとき、戦争は様相を一変し、近代の局面に突入する。⁽⁵⁵⁾ 鍊金術の幻想性は逆立ちした現実性だったのである。

中国の外に設定されたこのユートピアははからずも著者に、中国を位置づける座標軸を提供することになる。自己を外なる他者として相対化する稀有の視点を、ユートピアが可能にしたのである。偽葛洪は大秦国の国王に中国の政治をこう批判させている。

吾れ遙かに其の化を觀るに、乱兆已^すに六合に表れ、姦政已に八外に彰かなり。

たしかにこれだけのことなら、周初に、時間軸の上端に黄金時代を置く退化史観によっても容易な、ありきたりの当代政治批判にすぎまい。ところが、扶南の使者を詐称する中国商人が船に積んできた綵絹千匹を国王に献じようとしたときのことを、偽葛洪はこう描写する。国王は笑いながら、「夷狄の綵絹のみ」、「我が国の用うる所に非ず」、といて受け取らず、その眼には商人の服は「北地の帛、真に笑う可」きものと映った、と。北方辺境の夷狄としての中国という、他者の眼をかりた自己認識は、退化史観とはすでに無縁であ

る。

大秦国王に中国を夷狄と呼ばせたとき、偽葛洪は伝統的な中華・夷狄観を逆転させた。いまや中華は夷狄であり、夷狄が中華であった。価値のこの逆転には乗り越えなければならぬひとつの壁があった。

大秦にユートピアを投影したからといって、それがただちに中国Ⅱ夷狄観に向うものでないことは、『魏略』の例からわかる。『魏略』によれば、大秦の人は中国人に似ているが胡服をまとい、もと中国の一分枝だと自称しているという。そのユートピアは中国の否定として存在するのではない。中国に欠如しているもの、不完全なもの、政治の理念としては提示されながら実現していないものを、現に所有しているがゆえに、それはユートピアなのである。否定としてのユートピアにたいする、欠如としてのユートピア、あるいは補完としてのユートピアといつてよい。そのばあい、現実とユートピアの関係は、陰と陽のそれにひとしい。陰は陽の欠如態であり、陽は陰の欠如態であって、陰と陽はつねに相互補完的に作用する。欠如としてのユートピアは、べつの言葉でいえば陰陽論的ユートピアであり、もともと中国Ⅱ中華観のうえに成り立つユートピアだったのである。

偽葛洪の諸国志も、全体としてみれば欠如としてのユートピアであり、中国Ⅱ中華観と接触しないのは、その記述と構造から明らか

であろう。にもかかわらず、偽葛洪は大秦のコントにおいて、ついに陰陽論的ユートピアの限界を乗り越えた。それを可能にしたのは航海という舞台設定であった。扶南までの偽葛洪の航海と大秦までの中国商人（扶南の使者）の航海、そして偽葛洪の旅立ち——中国脱出——への決意、この三つの要素から成る舞台である。

いうまでもなく、中国Ⅱ中華観は観察者の視点を中国に一体化する、あるいは内在させるところに生まれる。そこから離脱するには、まず視点を中国から引き剥がさなければならぬ。若き偽葛洪の扶南への航海と伝聞は、錬金術の実践をさまたげる中国からの脱出という後年の決意によって完結する、そのような視点移動の過程であったといえよう。

航海すなわち場所の移動は、しかし、そのまま視点の移動を意味するわけではない。中国と一体化した視点を固執しつつ、航海することもできる。扶南の使者を自称する中国商人のばあいがそうだ。たしかに商人は、「大秦国は有らざる所無く、皆な中国の物より好し。永く相比方する理無し」と批評して、大秦国の全面的優位を認める。だがそれはあくまで欠如としてのユートピアの極限的な様相であり、商人は大秦を通商の相手国としか考えていないのである。そのことは商人にたいする偽葛洪の批判、「唯だ当し仁義を躬行し、操を守り澹泊にして、虚に耽り道を味い、内情に欲無き者は、此れを推して夫の大秦国に遊ばしむれば、必ずや或は意を得んか。如し

其れ爾らずして、交易を以て相尋求するは、実に理無きなり」、によって明らかであろう。

二つの中華観は大秦国で対面する。商人がもたらした中国の商品にたいしては、国王も大秦の生産品をしめして対応する。そのかぎり大秦国の優位は相対的なものにすぎない。しかし、大秦ではひとは「仁義を重んじて貪賊を惡み」、物はただ精神的価値の表現としてのみ価値をもつ。商人の献上品の粗末さは人びとの苦しみをあらわしているが、それは上古のユートピアである周代において、財貨を求めて狂奔し、侮蔑された者たちが味わった苦しみと等質のものである。こうして、「神仙を尊んで以て靈和を求め、清虚を敬んで以て四氣を保つ」大秦は、「乱兆已に六合に表れ、姦政已に八外に彰か」な中国にたいして、絶対的な優位に立つことになる。大秦はもはや欠如としてのユートピアではない。それは否定のユートピア、中国Ⅱ夷狄にたいする中華の国、道教的周代ユートピアの現在における再現として、海の彼方、世界の水平軸のうえに、屹立するのである。

「其の遐きを嫌わずして、其の邦に之かんと欲す。其の遠きを辞せざれば、必ず其の郷に到らん」として、中国を棄て、「人跡の逮る所」の生丹の地を超えて、大道の郷へ赴こうと決意した仮想的な航海者、偽葛洪の眼は、大秦国王の眼であるとともに、国王と中国商人の対面を見守り批評する眼でもある。航海という舞台設定が、著

者の視点にこの自由さを許したのであった。

たしかに、中華もなければ夷狄もない、というのではない。自己を相対化すること、他者の眼で自己を見ることは、国境を越えることが日常茶飯事と化した今日においても、陥穽に満ちた困難な課題である。まして中国Ⅱ中華観に呪縛された世界にあっては、それを逆転させることがすでに狂気と映る精神の作業であったにちがいない、偽葛洪みずから「狂人の志」といい、「人の我を視ること狂の如し」と述べたように。大秦Ⅱ中華観は裏返された中国Ⅱ中華観にすぎぬ、というのはやさしい。中華としての大秦はついに幻想のユートピアにすぎぬ、というのもしやさしい。だが、それはひるがえって考えれば、幻想のユートピアを設定することによってしか穿ちえない思想の頑な殻が中国Ⅱ中華観であった、ということにはかなるまい。そして、幻想であろうとなかろうと、ユートピアが否定ユートピアであるかぎり、それは現実批判の機能をもつことを、偽葛洪の物語は立証している。伝統的知識人の思考の核心にある中国Ⅱ中華観に、偽葛洪はまとも狙いを定めていたのである。

動乱の南北朝時代を生きたひとりの道教徒が、極西の地に幻想のユートピアを設定することによって、中国Ⅱ中華観を逆転させ、中国Ⅱ夷狄観を主張したこと、その書が重要な鍊金術書の一部を構成して、道教徒に読みつがれてきたことは、歴史の記憶にとどめておいてよい。

注

- (1) Henri Maspero, 'Un Texte Taoiste sur L'orient Romain', *Études Historiques, Civilisations du Sud*, 1950, pp. 93-108.
- (2) Maspero, op. cit., p. 95.
- (3) 饒宗頤,『太清金液神丹經』(巻下)与南海地理,『選堂集林・史林』中冊,中華書局香港分局,一九八二,五一〇—五八六頁。
- (4) 篠原俊次,『魏志』倭人伝の海上里程と『南州異物志』——『太清金液神丹經』をめぐる——,『古代学研究』一二九号,一九九三・七,一—二一ページ。
- (5) Maspero, op. cit., p. 101. なお,本稿一八六ページをみよ。
- (6) 陳国符,『中国外丹黄白法経訣出世朝代考』,『道藏源流統攷』,台北・明文書局,一九六一,二八九—二九二頁。
- (7) 任繼愈・鍾肇鵬編,『道藏提要』,中国社会科学出版社,一九九一,六四四頁。
- (8) 陳国符,『中国外丹黄白術考論略稿』,『道藏源流考』,北京・中華書局,一九六三,三七六—三七七頁。
- (9) 饒宗頤,前掲論文,五一五—五一七頁。咸和六年以降とする根拠は,巻中に蘇峻の乱(咸和三年)に言及するからである。
- (10) 『道藏提要』,六四四頁。
- (11) Maspero, op. cit., p. 98.
- (12) Maspero, op. cit., p. 100.
- (13) R. A. Stein, Remarques sur les mouvements du taoisme politico-religieux au II^e siècle ap. J.-C., *Toung Pao*, vol. L, Livr. 1-3,

1963, pp. 1-78. (R・A・スタン、川勝義雄訳「紀元二世紀の政治

宗教的道教運動について」『道教研究』第二冊、一九六七・三、五一―一三頁。) 同論文九六ページ、注5をみよ。

(14) Maspero, op. cit., pp. 98-99. なお、マスペロは序の「洪曾見人撰南方之異同、記外域之奇生」の「南方之異」を書名ととり、実在したいちばん近い題名の書として『南方異物記』を挙げているが、誤読である。偽葛洪はあきらかに複数の書を読んだが、諸国志のほとんどを『南州異物志』に依拠して書いた。

(15) 小川博、「『南州異物志』輯本稿」、『安田学園研究記要』、第2号、一九五八、三五―四六ページ、第3号、一九五九、三五―四四ページ。内田吟風、「『異物志』考——その成立と遺文——」、『森鹿三博士頌寿紀念論文集』、同朋社、一九七七、二七五―二九六ページ。

(16) 陳運溶、上掲書、八葉裏―九葉表、小川、前掲論文、3、三七―三八ページ、内田、前掲論文、二八九ページをみよ。

(17) 清・嚴可均、『全三國文』巻七四・万震、向達、「漢唐向西域及海南諸國古地理書叙録」(『唐代長安興西域文明』所収、生活・読書・新知三聯書店、一九五七)も、四言韻語に注目し、採録している。

(18) 饒宗頤、前掲論文、五一六―五一七頁。饒宗頤が晋人の仮託とみるのは、この二つの四言韻語と、大秦国の条にみえる老子化胡説にかんする部分である。

(19) 饒宗頤、前掲論文、五七三頁。なお、注(49)をみよ。

(20) Pliny, *Natural History*, vol. I (with an Eng. tr. by H. Racham), Harvard U. P., 1949, Libri II. xcviII. 211. 引用は、中野定雄

他訳『プリニウスの博物誌』第一巻、一二六ページによる。

(21) *La Géographie de Ptolémée, L'inde* (texte établi par Louis Renou), Librairie Ancienne Edouard Champion, 1925, Livre VII, II. 31.

(22) 村川堅太郎訳註『エリュトウラー海案内記』、中公文庫、一九九三、二〇八ページ、註(9)。

(23) 豊島与志雄他訳『千一夜物語』(一)、岩波文庫、一九八八。

(24) この文章は、『御覧』巻七八八・杜薄国には「唐書曰」として引かれているが、ここにいう「唐書」は「通典」の誤りである。

『唐書』にはむろん記載されていない。杜薄だけではない。『御覧』のこの前後には、多蔑国・多摩国・哥羅舍分国・杜薄国・烏篤国・薄刺洲の六国がつづけて記載されており、すべて「唐書曰」となっているが、いずれも『通典』巻一八八からの引用である。もっとも『通典』のほうは、杜薄・薄刺・四国(勃焚・火山・無論・婆登)置いて、烏篤・二国(陀洹・訶陵)置いて、多蔑・多摩長・哥羅舍分の順序に配列されている。『御覧』が『通典』に依ったことは、『通典』の薄刺・勃焚と『御覧』の薄刺洲の条を比較することによって証明される。まず『通典』の薄刺の条に、

薄刺国、隋時聞焉、在拘利南海湾中。其人色黑而齒白、眼正赤、男女並無衣服。

つづけて勃焚の条に、

勃焚洲、抱朴子云、勃焚洲在南海中、薰緑水膠所出、膠如楓脂矣。

……

とある。ところが『御覧』の薄刺洲の条では、つぎのようになってゐる。

唐書曰、薄刺洲、隋時聞焉、在拘利南海灣中。其人色黑而齒白、眼正赤、男女並無衣服。一名勃焚洲。

抱朴子云、勃焚洲在薰綠水膠所出、楓脂矣。……

誤字・脱字は咎めないとしても、『御覽』の編集にたずさわった者が、どこをどう誤解し、辻褄を合わせるために、どこをどう改竄したか、一目瞭然である。このような誤りは、むしろ『通典』に依るものでなければ生じなかった。このばあいにかぎらず、『御覽』にはしばしば書名の誤りがある。

(25) 注(24)の引用をみよ。無論とおなじく、『隋時聞焉』とあり、『万州異物志』からの引用であることを示している。

(26) 饒宗頤、前掲論文、五四三頁。

(27) 饒宗頤、前掲論文、五四二頁。

(28) 火珠については、Joseph Needham, *Science and Civilization in China*, vol. IV : 1, Cambridge U. P., 1962, pp. 111-118. (橋本万平他訳『中国の科学と文明』第七巻・物理学、思索社、一九七七年、一四四—一五二ページ)、王錦光・洪震寰、『中国光学史』、湖南教育出版社、一九八五、四九—五二頁、をみよ。なお、章鴻釗『石雅』(『地質專号』乙種第二号、一九二七、中央地質調査所)上編・火齊珠は、火齊珠を火珠と同じとみる。

(29) 今井湊、『中国物理雜識』、全国書房、一九四六、九—一九二ページ。

(30) 嚴敦筈、『中国古代航海技術上の成就』、自然科学史研究所主編『中国古代科技成就』、北京・中国青年出版社、一九七八、六二八—六二九頁。

(31) H. Congreve, 'A brief notice on some contrivances practiced

by the native mariners of the Coromandel Coast, in navigation, sailing, and repairing their vessels', *Introduction a l'astronomie nautique arabe* (ed. par G. Ferrand), Paris, 1928, p. 28.

(32) Kurakichi Shiratori, 'Chinese Ideas Reflected in the Ta-ch'in Accounts', *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 15, 1956, pp. 25-92.

(33) スタン、前掲論文、一三—三〇ページ。

(34) スタン、前掲論文、一三—二四ページ。

(35) 王明編、『太平經合校』、北京・中華書局、一九六〇、二二五頁。

(36) 胡寄窗、『中国経済思想史』上、上海人民出版社、一九六二、二〇六—二一五頁を参照。

(37) 杜亜泉等他編、『植物学大辞典』、商務印書館、一九三三。苜蓿、六八二—六八三頁、天監、一七二頁、小苜蓿、八二頁、紫苜蓿、一〇一—一〇二頁。

(38) Pliny, op. cit., vol. IV, 1945, Libri XVIII. xliii. 144-148. 引用は144。中野訳、前掲書、第II巻、七五八ページによる。

(39) 顧吉辰、『我国古代引種国外植物首蓿』、『中華文史論叢』、上海古籍出版社、一九七九年第三輯、六六頁。

(40) Thakur Balwant & K. C. Chunekar, *Glossary of Vegetable Drugs in Brihatrayi*, Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi 1972, pp. 421-422.

(41) 堀田満他編、『世界有用植物辞典』、平凡社、一九八九、三〇—一三〇ページ。

(42) 前掲『植物辞典』、四三九ページ。

(43) 前掲『植物辞典』、四四一—四四二ページ。

- (44) 前掲 *Glossary*, p. 422.
- (45) 前掲 *Glossary*, p. 422.
- (46) 前掲『植物辞典』、四三九—四四一ページ。
- (47) 内田、前掲論文、二八四ページ。
- (48) 内田、前掲論文、二九三ページ。
- (49) 饒宗頤、前掲論文、五七二—五七三頁。五点とは、一、万震の書という、信頼できる三世紀の資料に、主として依拠していること、二、劉宋以来の南海の事蹟を記しておらず、成書は六世紀までは降らないこと、三、他書の記載の誤りを訂正できる資料を含んでいること、四、初期香葉史の重要文献であること、五、乾陀羅と改める(五二〇年ごろ) 以前の国名葉波を用いており、成書はそれ以前と証明できること。なお、四については、「丹経贊之香葉資料」という一章を立てて(五六二—五六九頁)、本草をふくめて関連資料を丹念に拾っている。
- (50) Maspero, op. cit., p. 101.
- (51) スタン、前掲論文、一三ページ。
- (52) 『神丹経』下には「安息・大秦の中間に在り」とみえている。『御覧』引南州異物志の文は「大秦」の二字を脱落させたのであらう。なお、饒宗頤、前掲論文、五五四頁を参照。
- (53) 『直元妙道要略』(『道蔵』洞神部・衆術類)、三葉裏。
- (54) 郭正誼、「火藥発明史料的一点探討」、『中国古代化学史研究』(趙匡華主編)、北京大学出版社、一九八五、四六〇—四六二頁。
- (55) Needham, op. cit., vol. 5, part 7, 1986, pp. 108-126, を参照。